



文部科学省

国立教育政策研究所

National Institute for Educational Policy Research

いじめ	追跡
	調査
2010 - 2012	
いじめ Q & A	

平成 25 年 7 月

生徒指導・進路指導研究センター

## 目 次

はじめに	3
<b>本冊子について</b>	4
■ 本当に、いじめにピークはないのか？	5
■ 本当に、どの子供にも起きうるのか？	6
■ 小学校や小学校からの追跡で、何が分かったのか？	8
■ 本当に、一部の特別な子供の問題ではないのか？	10
■ 暴力を伴ういじめは、増えているのか？	11
■ 暴力を伴ういじめも、誰にも起きるのか？	12
■ いじめのタイプ間には、どのような重なりがあるのか？	14
■ 調査の概要	15
■ 2010～2012年度 小学校 いじめ被害経験率	16
■ 2010～2012年度 小学校 いじめ加害経験率	18
■ 2010～2012年度 中学校 いじめ被害経験率	20
■ 2010～2012年度 中学校 いじめ加害経験率	22
■ 2010年度 小学校4年生 いじめ被害経験率推移	24
■ 2010年度 小学校4年生 いじめ加害経験率推移	26
■ 2010年度 中学校1年生 いじめ被害経験率推移	28
■ 2010年度 中学校1年生 いじめ加害経験率推移	30
■ 再録 2007年度 小学校4年生 いじめ被害経験率推移	32
■ 再録 2007年度 小学校4年生 いじめ加害経験率推移	34

はじめに

昨年（平成 24 年）は、いじめ自殺事案の報道を機に、いじめ問題に対する学校や教育委員会の取組が大きく問い直されました。文部科学省が毎年行っている『児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査』（いわゆる『問題行動調査』）では、平成 18 年度より「発生件数」ではなく「認知件数」と表現するとともに、「調査や個別面談の実施など、定期的に児童生徒から直接状況を聞く機会を必ず設け」て積極的に把握するよう、教育委員会や学校に求めてきました。いじめの多くは、大人の目には「見えにくい」形で行われます。認知が十分でなければ、事後の対応も未然防止の取組も不十分なものにしかならないからです。

いじめの実態把握に関して、学術研究において最も適した方法とされているのが、自記式の質問紙調査です。教師や他の子供からの報告やインタビュー、観察等に基づく方法よりも客観性や比較可能性等の点で優れているとの理由から、学術研究の分野では子供自らが回答する形式のアンケート調査が広く用いられてきました。その自記式質問紙調査法により、いじめやそれに関連する要因について定点観測的に行われてきたのが、国立教育政策研究所の『いじめ追跡調査』です。

国立教育研究所時代（1998 年）から現在に至るまで、その時々々の修正を加えつつも調査内容の比較可能性を維持し、15 年間にわたって行われてきた『いじめ追跡調査』の特長は、同じ内容の調査を繰り返すことで数量的な変化を経年的に追えるという点にあります。児童生徒の発達や変容の過程も追えるよう、匿名性を維持しつつ個人を特定できるように設計されていることで、いじめに関して語られることの多い言説の真偽を検証できるようになっているのです。

また、日本全体の状況を推測する際の根拠となるデータの収集・蓄積という条件をも満たすため、大都市近郊にあり、住宅地や商業地のみならず、農地等も域内に抱える地方都市を代表的な地点として選んだ上で、市内の全小中学校（小学校 13、中学校 6 の計 19 校）に在籍する児童生徒全員（小学校 4 年生以上）を対象としたコホート（同時出生集団）調査という形をとっています。15 年間、計 30 回の調査対象者数は、延べ 14 万人を越えています。

これにより、1 回限りの大規模調査では得られない、あるいは対象数が限られていたり偏っている事例の追跡調査では得られない、高い質のデータを得ることに成功しています。15 年間の継続調査の結果が安定していることは、その質の高さの証し<sup>あか</sup>とも言えるでしょう。

この追跡調査のうち、1998～2003 年にかけて行われた 6 年間分の結果については、国立教育政策研究所と文部科学省の共催による「平成 17 年度教育改革国際シンポジウム」において報告され、その内容は国立教育政策研究所／文部科学省編『平成 17 年度教育改革国際シンポジウム「子どもを問題行動に向かわせないために ―いじめに関する追跡調査と国際比較を踏まえて―」（報告書）」（平成 18 年）に収録されています。また、2004～2006 年の 3 年間の結果については、学校現場等で役立つ知見の形でまとめ、『いじめ追跡調査 2004-2006』（平成 21 年）として、2007～2009 年の 3 年間の結果についても、同様に『いじめ追跡調査 2007-2009』（平成 22 年）として刊行されています。

本冊子は、その続編として、2010～2012 年の 3 年間分のデータを中心に分析を行うとともに、必要に応じて 2004 年以降の分析を行うなど、最新の結果をより確かな形で示すようにしたものです。本冊子をお読みいただくことにより、皆さんのいじめに対する認識が深まり、それぞれの取組が一層進んでいくことを願っています。

平成 25 年 7 月

国立教育政策研究所 生徒指導・進路指導研究センター

## 本冊子について

### ○本冊子の目的

いじめのような問題（第三者には「見えにくい」問題）について、その実態や発生メカニズムを明らかにしようとする際には、児童生徒に対する何らかの調査が不可欠です。また、調査を実施する場合でも、1回限りで終わる単発の調査結果を安易に一般化することには危険が伴いますから、同一対象に対して複数回の調査を繰り返すこと、定期的に調査を行うことも必要になります。しかも、複数回の結果をただ並列するだけでは、傾向は明らかになっても、その奥にある変容過程までは明らかになりません。したがって、詳細な分析を行うためには、個人を特定できる形で追跡的に調査を行うことも必要になってきます。

ところが、いじめのようにデリケートな問題を、上に述べたような理想的な形で、とりわけ個人を特定できる形で各学校が実施しようすると、児童生徒が本当のことを答えない可能性が考えられます（被害経験を答えることによって更にいじめがエスカレートすることを恐れる、加害経験を答えることによって叱責されることを恐れる等のため）。

国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センターでは、各学校現場が直接に収集することが困難なデータを各学校や教育委員会等に代わって収集・蓄積するため、いじめの追跡調査を継続的に行っています。本冊子は、そうした調査の中から、2010～2012年の3年間、計6回にわたる結果を中心にまとめ、広く活用していただけるようにしたものです。

### ○本冊子の構成

6回にわたる膨大なデータをただ羅列しただけでは、そこから何が明らかになっているのかが分かりにくいことでしょう。そこで、本冊子では、前半と後半の2部構成とし、追跡調査ならではの分析から得られる知見によって、いじめに関する「正しい認識」を獲得していただけるように配慮しました。

まず、前半部分では、いじめに関する素朴な疑問に答える「Q&A形式」を採用することにしました。3年間分のデータを再集計したり図示したりして、いじめの実態をより具体的かつ正確に把握してもらえるように配慮しました。既に発行済みの『いじめ追跡調査 2004－2006』や『いじめ追跡調査 2007－2009』で議論された内容については単なる繰り返しを避け、その議論の概要とともに新たなデータが付け加わることで何が分かったのかを示すという形にしています。

後半部分には、この調査がどのように行われたのかをまとめた概要と、調査結果の単純集計結果（いじめに関する項目のみ）を収録しました。2010年度から2012年度までの3年間に、いじめの経験率にどのような変化があったのかを小学校と中学校を分けて見られるように、いじめの種類ごとに毎回の調査結果を男女別の構成比（棒グラフ）で示してあります。また、小学校の4年生から6年生、中学校の1年生から3年生という学年進行に伴い、いじめの経験率にどのような変化が現れるのかについても御覧いただけるようになっていきます。こちらについては、『いじめ追跡調査 2007－2009』から一部のデータを再録し、2007～2012年までの6年間分のデータ、小学校4年生から中学校3年生に至るまでの学年進行を見ていただけるようになっていきます。

※単純集計結果の表示は、以下のような色分けになっています。後半部分のグラフだけでなく、前半部分で示されているものについても同じ色分けになっていますので、各年度ごとの集計なのか、特定の学年の集計なのかが一目で分かります。

- ・各年度ごとに、小学校の4～6年生までの3学年分を集計したものと、中学校の1～3年生までの3学年分を集計したもの

#### →薄青色のグラフ

- ・2010年度の小学校4年生が6年生になるまでの3年間の変容と、2010年度の中学校1年生が3年生になるまでの3年間の変容、更に2010年度の中学校1年生が小学生であった2007年から2009年までの3年間（小学校4年生から6年生になるまで）の変容を示したもの

#### →オレンジ色のグラフ

## ■本当に、いじめにピークはないのか？

『いじめ追跡調査 2004 - 2006』では2006年秋のいじめの社会問題化を「いじめの第3のピーク」と表現することが適切でない指摘し、『いじめ追跡調査 2007 - 2009』でも「いじめにピークがあったとは考えにくい」とされています。今回のデータからも、同じようなことが言えるのでしょうか。

最も典型的ないじめ行為である「仲間はずれ・無視・陰口」について、前回までの結果に今回の結果を付け足した小学校の被害経験率の推移を示したのが図1-1と図1-2です。この9年間で見ると、男子では平均が45.0%で±7%の範囲で増減、女子では平均が51.5%で±9%範囲で増減していますが、特に急増したり急減したりするということはありません。いじめは常に起こっているものであり、「流行」とか「ピーク」という感じ方や考え方は誤りであることが分かります。

また、2006年秋のいじめの第3次社会問題化や2012年夏の第4次社会問題化の時期も、特に急変はしていないことが確認できます。つまり、いじめの社会問題化というのは、いじめ件数の増減とは関係なく、いじめ自殺事案に対する学校や教育委員会の対応姿勢を問題視する世論によってもたらされるもの、と考えることができるでしょう。大切なことは、社会問題化の有無にとらわれず、常にいじめに対して適切に取り組み続けていく姿勢であると言えます。

ちなみに、中学校の被害経験率を見ると（図は省略）、男子では平均31.8%で±9%の増減、女子では平均39.9%±10%の増減になります。

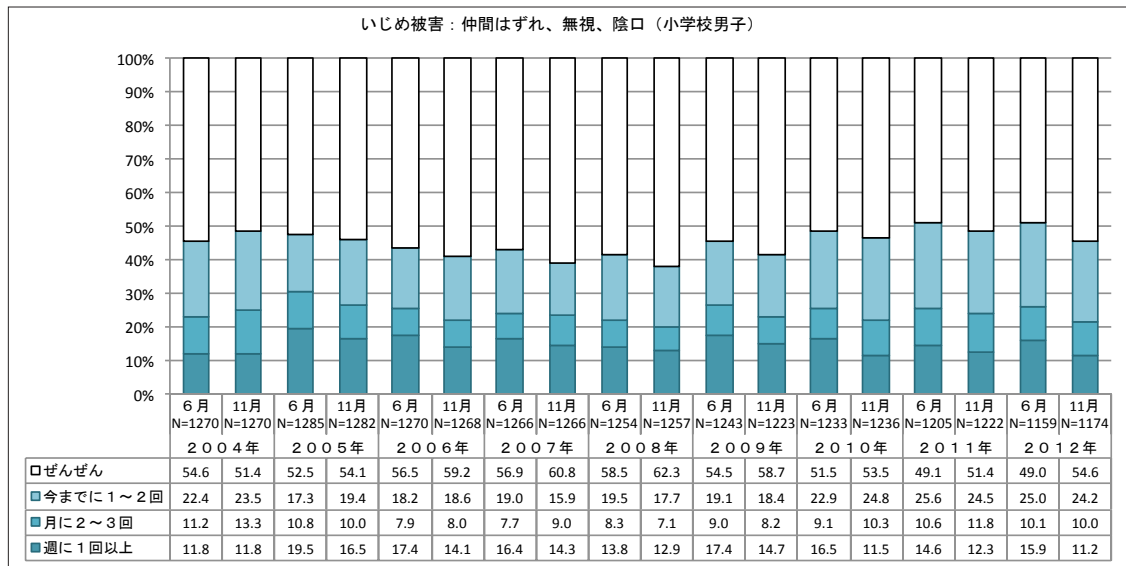


図1-1 小学生の「仲間はずれ・無視・陰口」被害経験率の推移（男子）

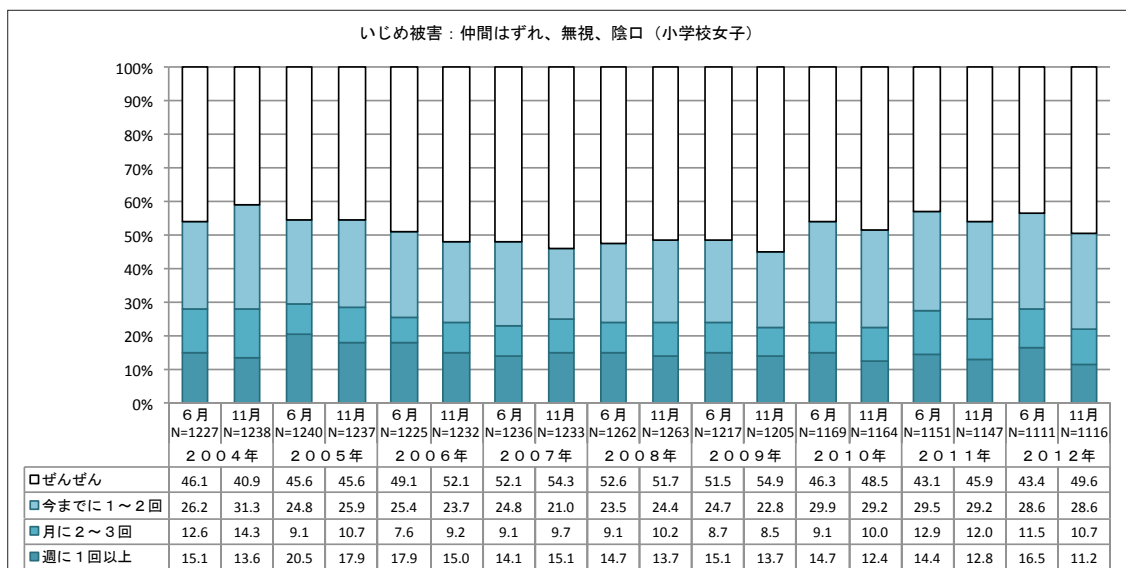


図1-2 小学生の「仲間はずれ・無視・陰口」被害経験率の推移（女子）

■本当に、どの子供にも起きうるのか？

Q 『いじめ追跡調査 2004 - 2006』でも『いじめ追跡調査 2007 - 2009』でも、いわゆる「いじめられっ子（いじめられやすい子供）」や「いじめっ子（いじめやすい子供）」はほとんど存在せず、多くの児童生徒が入れ替わりながらいじめに巻き込まれていることが示されました。今回も、同じことが言えるのでしょうか？

A 同じことが言えます。1996年1月に出了れた文部大臣の緊急アピールでは、「深刻ないじめは、どの学校にも、どのクラスにも、どの子どもにも起こりうる」と明言されていますが、これは比喩的な表現でも誇張された表現でもありません。いわゆる「荒れた学校」や「問題のある学年」だけでいじめが起きているわけではありませんし、ほとんどの児童生徒がいじめの被害者になりうること、また加害者にもなりうるということが調査データによって確認されています。

ここでは、特に、「どの子どもにも起こりうる」という表現が意味している実態がどのようなものなのかについて正しくイメージしていただけるよう、図2を準備しました。これは、2010年度に入学した中学1年生が中学3年生になるまでの3年間でどのように被害に遭うのかを、「仲間はずれ、無視、陰口」を例にとって追跡的に示したものです。基本的には、巻末の28ページに示されている「問5ア」のデータと同じものですが、3年間6回分のデータが揃っている生徒（714名）のみを対象としている点、男女合わせた数字で示されている点が異なります。

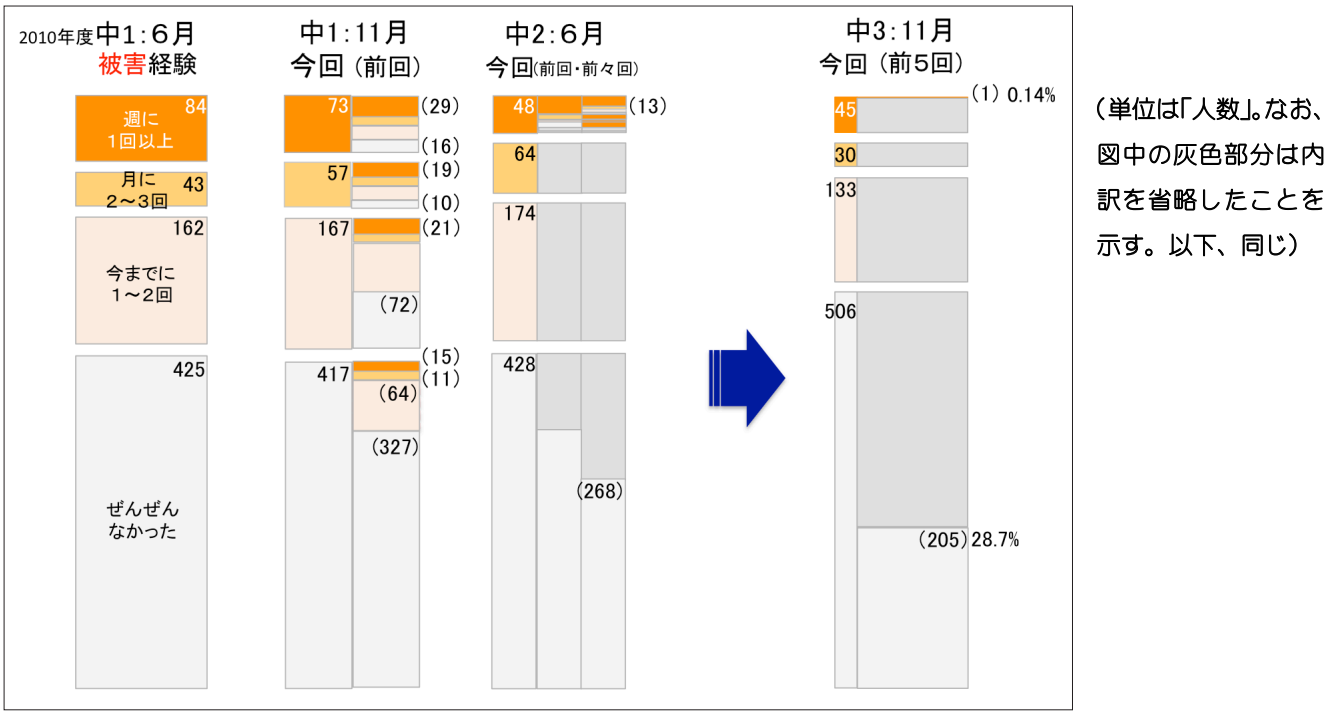


図2 2010年度中学1年生の「仲間はずれ・無視・陰口」被害経験の3年間の推移

まず、一番左の棒グラフを見てください。「中1：6月被害経験」という見出しの下に、「週に1回以上」「月に2～3回」「今までに1～2回」「ぜんぜんなかった」という回答の分布が示されています。各マスの右上の小さな数字は実人数を示しています。そして、その右隣には「中1：11月」という見出しがあり、その下に「今回（前回）」と書かれた二つの棒グラフを合わせた形で、「週に1回以上」「月に2～3回」「今までに1～2回」「ぜんぜんなかった」という回答の分布が示され、やはり実人数が示されています。

最初に「中1：6月」と「中1：11月」の今回分（左側）の数字を見比べてみましょう。そこには、ほとんど同じような数字が並んでいることがわかります。6月の「週に1回以上」の被害経験者84名に対し、11月では73名とやや減ります。しかし、「月に2～3回」を見ると6月の43名に対し11月は57名、「今までに1～2回」を見ると6月の162名に対し11月は167名とやや増加し、「ぜんぜんなかった」では6月が425名に対し11月が417名とやや減る、という具合です。2010年の6月と11月ですから、どの学校もクラス替えは行っていません。学年はもちろん、クラスも同じ時期ですから、生徒同士の人間関係も大きくは変わらず、被害経験者の数も似た値を示すのは当然のように思われるかも知れません。

しかし、そういった「思い込み」で数字を受け止めてはなりません。ほとんど同じような数字でありながら、その内訳は

大きく変わっているのです。「中1：11月」の右側の「(前回)」分に示されているのは、11月の回答者が前回(中1の6月)はどのように回答していたのかを示しています。例えば、「ぜんぜんなかった」と答えているのは11月時点では417名いますが、その中で「(前回)」も「ぜんぜんなかった」と答えたのは( )の中に示した327名にすぎないのです。6月時点では被害経験のなかった98名(=425 - 327)の生徒が、11月時点では新たに被害経験を訴えているということなのです。同じクラス内で同じ人間関係、ほぼ同じ割合の被害経験でありながら、6月に被害経験を訴えた生徒のうち31%(=90 ÷ 289 × 100)は被害を受けなくなり、11月に被害経験を訴えた生徒の33%(=98 ÷ 297 × 100)は新たに被害を受けたこととなります。同じクラスの中でありながら、少なくとも半年で3分の1の被害経験者が入れ替わっているというのが、いじめの発生実態なのです。

こうした入れ替わりは、いわゆる「いじめられっ子」と目されるであろう「週に1回以上」の被害経験者だけで見た場合にも同様です。中1の11月時点で73名いる「週に1回以上」の被害経験者ですが、「(前回)」も「週に1回以上」と答えていたのは( )の中に示した29名にすぎません。残る44名(=73 - 29)は、6月には「月に2～3回」「今までに1～2回」「ぜんぜんなかった」と答えていた生徒なのです。そして、中1の6月に「週に1回以上」の被害経験を訴えた生徒のうち18%(=15 ÷ 84 × 100)はいじめられなくなり、48%(=(19+21) ÷ 84 × 100)は、その頻度が少なくなっています。つまり、半年後も高頻度の被害経験が繰り返されていたのは、34%(=29 ÷ 84 × 100)なのです。

では、同じようにして、「中2：6月」の棒グラフを見てみましょう。中1時と比べ、「週に1回以上」と答えたのは48名へと減っていますが、「ぜんぜんなかった」と答えた生徒は428名とほとんど変わりません。さて、中2の6月に「週に1回以上」の被害経験を訴えた生徒について中1の6月時からの経験を見てみると、前回・前々回から通して3回とも「週に1回以上」の被害経験を訴えた生徒は( )内に示された13名となります。これは、中1の6月時の「週に1回以上」の被害経験者の15%(=13 ÷ 84 × 100)にすぎません。また、「ぜんぜんなかった」と答えた生徒のうち、それが3回連続していた生徒は( )内に示された268名にまで減ります。1年半の間に被害を受けなかった生徒は38%(=268 ÷ 714 × 100)ということになり、全体の4割を切ってしまいます。

そして、4回目、5回目の結果を図示するのを省略して「中3：11月」の今回分を見てみましょう。「ぜんぜんなかった」と答えた生徒は、506名と大きく増えています。ただし、「週に1回以上」と答えた生徒の数は45名で、「中2：6月」の48名と大差ありません。この2回分の数字だけを見たなら、45名の「いじめられっ子」が高頻度の被害を受け続けていたかのように推測したくなるのも無理はありません。しかし、実際には被害者は入れ替わり続け、最終的に6回とも「週に1回以上」の被害経験を訴えた生徒は僅か1名(全体の0.14%)にとどまります。また、6回とも被害経験が「ぜんぜんなかった」と答えた生徒も205名(全体の28.7%)にとどまります。

こうした傾向は、加害経験について見た場合にも変わりません。下の図3は、先の図の右端の棒グラフの数値を円グラフ状に示した被害経験(左)と新たに示す加害経験(右)です。両者が驚くほど酷似していることが御覧いただけるでしょう。どちらも、特定の児童生徒に偏ることなく入れ替わるために、このような図になると考えられます。加害経験が「ぜんぜんなかった」と答えた生徒は、713名中の203名(28.4%)です。ちなみに、加害経験についても巻末の30ページに示されているデータに相当しますが、3年間6回分のデータが揃っている生徒のみ、男女合わせた数字が示されています。

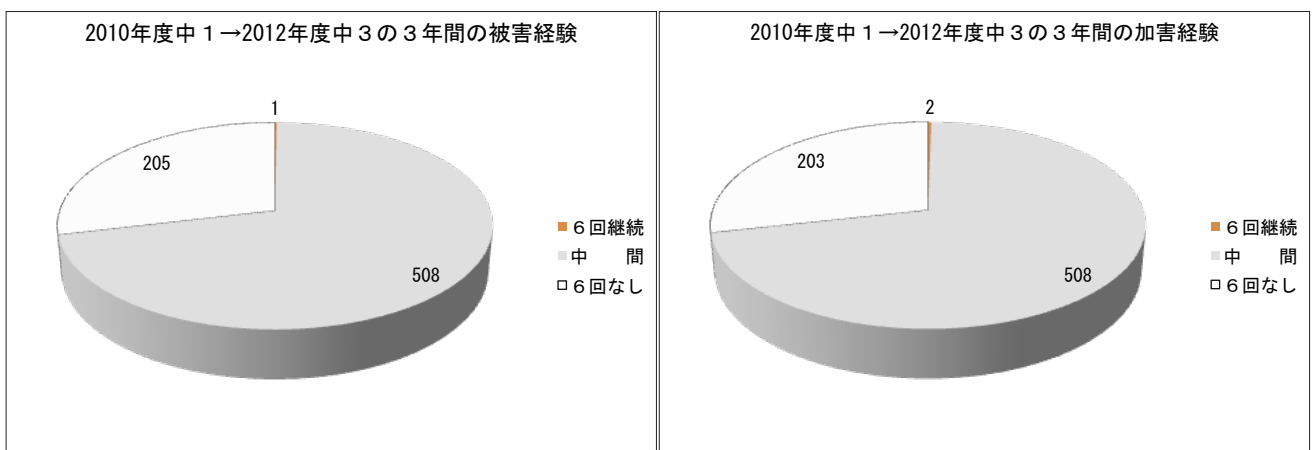


図3 2010年度中学1年生の3年間6回分の「仲間はずれ・無視・陰口」経験(被害・加害)

## ■小学校や小学校からの追跡で、何が分かったのか？

**Q** 中学校の発生実態については、よく分かりました。しかし、同じことは小学生についても言えるのでしょうか？  
また、小学4年生から中学3年生までの6年間では、どのような発生実態になるのでしょうか？

**A** 最初に、2010年度の小学4年生が6年生になるまでの3年間の傾向についてお示しします。中学校と同様に、「仲間はずれ、無視、陰口」のデータで見えていくことにします。基本的には、被害経験については巻末の24ページ、加害経験については26ページに示されているデータと同じものになります。ただし、3年間6回分のデータが揃っている生徒（被害経験は707名、加害経験は703名）のみを対象にしている点と、男女合わせた数字が示されている点が異なります。

下の図4からわかるとおり、前ページに示した中学校の場合と似た結果であることがわかります。小学生の場合には、中学生より被害経験も加害経験も多いことから、「ぜんぜんなかった」が6回続いた児童も少なくなることが確認できます。被害経験では707名中の93名（13.2%）、加害経験では703名中の101名（14.3%）となり、いじめを一部の「いじめっ子」

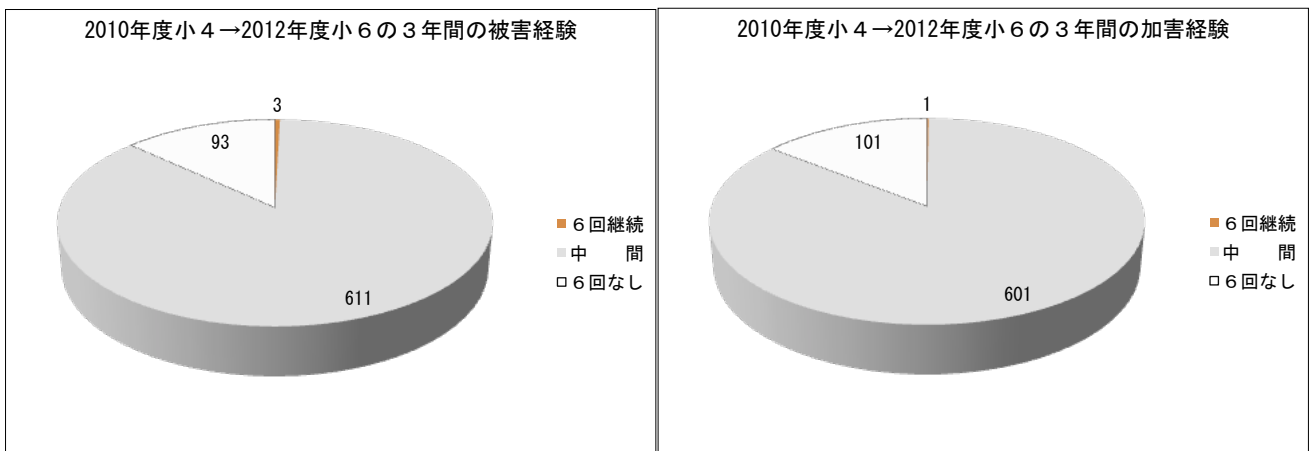


図4 2010年度小学4年生の3年間6回分の「仲間はずれ・無視・陰口」経験（被害・加害）

や「いじめられっ子」の問題であるかのように見ていくことは、小学校においても誤りであることがわかつておきます。

では、小学4年生からの6年間で見ただけの場合にはどうでしょうか。前ページに示した中学生が小学4年生だった2007年から中学3年生になる2012年までの6年間12回分についてデータが揃っている633名（被害経験）と628名（加害経験）について示したのが、図5のグラフです。まず、左の被害経験ですが、12回にわたって「週に1回以上」の被害が継続した者は0名で、実際にいたのは11回被害が継続した1名（0.16%）でした。そして、12回とも経験がなかった者は82名（12.9%）となっています。また、右の加害経験でも、12回にわたって「週に1回以上」の加害が継続した者、11回にわたって加害が継続した者は共に0名、実際にいたのは10回加害が継続した2名（0.3%）でした。そして、12回とも経験がなかつ

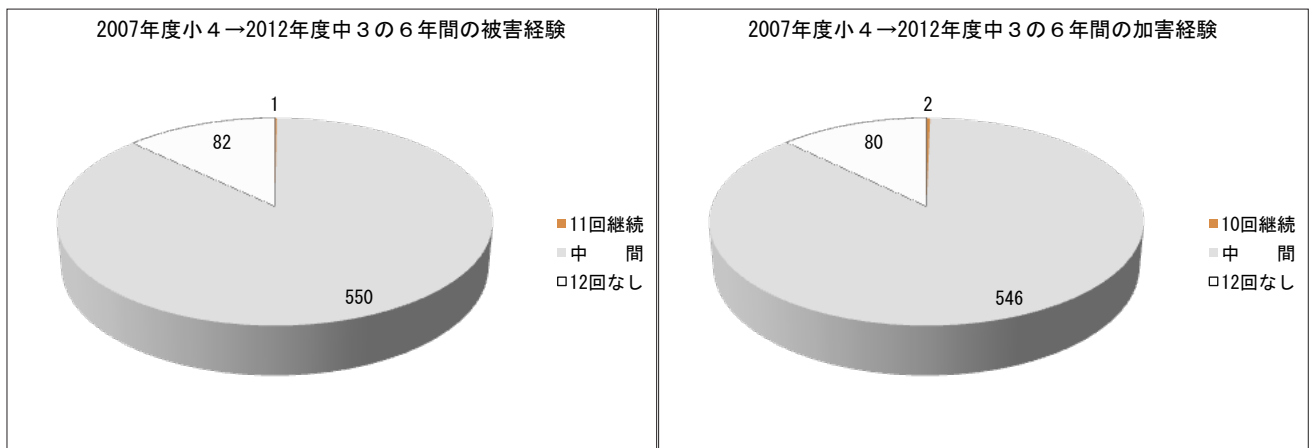


図5 2007年度小学4年生の6年間12回分の「仲間はずれ・無視・陰口」経験（被害・加害）

た者は80名（12.7%）でした。

ちなみに、2007年度の小学4年生が6年生になるまでのデータについては、被害経験を巻末の32ページに、加害経験

を34ページに再録しています。参考までに小学校時代の3年間の経験についてお示ししたのが、図6のグラフになります。小学校の3年間6回とも「週に1回以上」

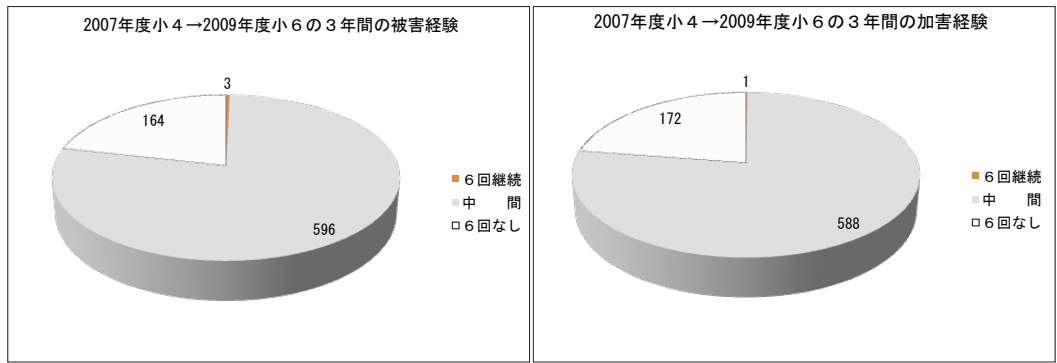


図6 2007年度小学4年生の3年間6回分の「仲間はずれ・無視・陰口」経験（被害・加害）

の被害経験のあった児童は3名（0.4%）、「ぜんぜんなかった」児童は164名（21.6%）であり、「週に1回以上」の加害経験のあった児童は1名（0.13%）、「ぜんぜんなかった」児童は172名（22.6%）でした。

『いじめ追跡調査 2007 - 2009』の中で2004年度の小学4年生が2009年度に中学3年生になるまでの6年間について示したときには、小学校・中学校ともに3年間6回分で「ぜんぜんなかった」と答えた者は被害・加害それぞれ2割程度、6年間で「ぜんぜんなかった」と答えた者はそれぞれ1割程度でした。それに対して、今回の6年間の結果については、「ぜんぜんなかった」と答えた者が小学校の3年間6回分では被害・加害ともに15%未満、中学校の3年間6回分では3割未満、6年間12回分では13%未満ということになっています。「誰にでも起きうる」といういじめに巻き込まれる児童生徒の割合が6年前と比べて若干でも減った（被害者や加害者の広がり小さくなった）かのようにも見えます。

ちなみに、6年間分の推移について、この数年間でどの程度に変化したのかを比較できるように図示したのが、図7のグラフです。ほとんど同じような数字が並んでいることがおわかりいただけるでしょう。「ぜんぜんなかった」と答えている児童生徒の割合は、被害経験では10.8%から13.2%の間、加害経験では11.1%から14.7%の間で推移しています。

いずれにしても、毎回の調査時点で似たような値を示す「仲間はずれ、無視、陰口」の経験率ですが、一部の特定の児童生徒だけが巻き込まれているわけではなく、ほとんどの児童生徒が被害者にはもちろん、加害者になっても不思議ではない、被害者も加害者も大きく入れ替わりながらいじめが進行するという実態は、大きくは変わっていないと言えます。

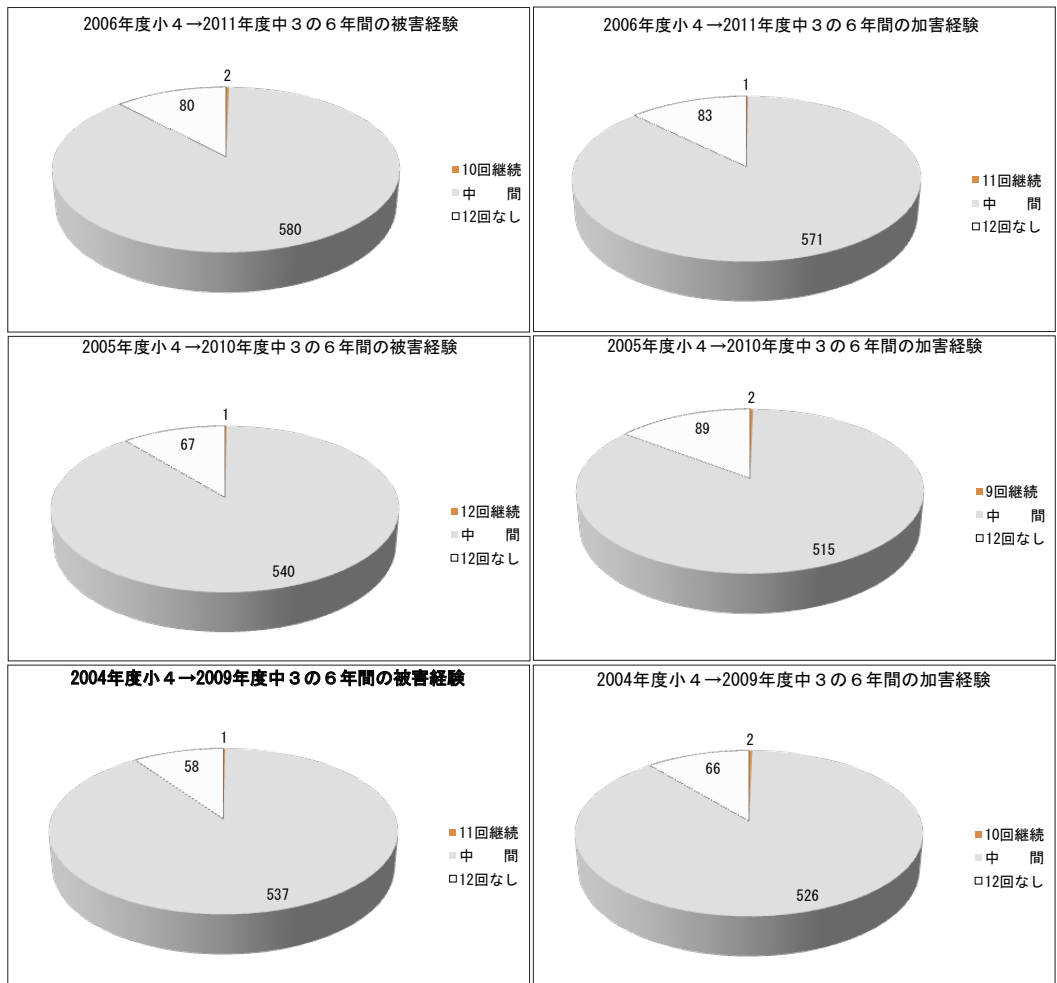


図7 小学4年生から中学3年生までの6年間12回分の「仲間はずれ・無視・陰口」経験の変化（被害・加害）

## ■本当に、一部の特別な子供の問題ではないのか？

**Q** いわゆる「いじめっ子」や「いじめられっ子」と呼ばれるような常習性の高い児童生徒、すなわち「週に1回以上」のいじめ被害経験や加害経験が継続する児童生徒がほとんど存在しないことは分かりました。しかし、「週に1回以上」という高頻度の経験に限定しなければ、やはり教師が気になる特定の児童生徒が主に関わっているではありませんか？

**A** 先生方が「気になる子」が中心になっていじめの被害や加害が生まれていると信じたい気持ちはわかります。しかし、「仲間はずれ・無視・陰口」や「からかう・悪口」といった行為は、誰にでも簡単に実行できるものです。言い方を換えれば、個々の行為自体は「ささいなこと」であり、「問題性は低い」のです。一般に「暴力」と称されるものは、行為自体の「問題性が高い」ので、それを行う児童生徒も「問題性の高い子供」に限られることがほとんどです。ところが、いじめ行為、それも暴力を伴わない場合には、そういった図式はあてはまりません。個々の行為自体は「ささいなこと」であり、「問題性は低い」ために、誰もが被害者になりうるだけでなく、加害者として加わることも容易なのです。

ところが、そうした、一見、「ささいな行為」でありながら、それをしつこく繰り返したり、誰もが加わりやすいことから集団で集中的に行われたりした場合、被害者に大きな精神的苦痛（いらだち・困惑・不安感・屈辱感・孤立感・恐怖感等）がもたらされることがあります。特別な児童生徒が激しい行為を行っているわけではなくとも、死に至らしめる深刻ないじめになり得るのです。それがいじめ行為の怖さであり、全ての児童生徒を対象にした取組を必要とする理由です。

図8は、「週に1回以上」の頻度に限定することなく、「月に2～3回」や「今までに1～2回」も含め、各調査時点ごとの被害経験や加害経験の有無を数えた場合の集計結果です。すなわち、頻度の多少を問わず、経験があったかなかったか、あったと答えたら1回分として数えた結果です。6年間で12回の調査時点がありますから、最大は12回分となります。

大きく偏ることのない分布状況からは、一部の特定の児童生徒が何度も繰り返しているだけなのではないかとか、大半の児童生徒は1～2回くらいの「魔がさした」程度なのではないか等の推測は、全くの誤りであるとわかります。

例えば、12回中6回以上にわたる経験者を「常習的」と見なすと仮定した場合(図中の網掛け部分)、被害経験では4割強、加害経験でも4割弱の児童生徒が該当することになります。先生方が「気になる子」は35人規模の学級で4～5名いるかどうかくらいと思われるので、みなさんの予想を大きく上回る児童生徒が、被害者としても加害者としても関わっていることがおわかりいただけると思います。

こうしたいじめの発生状況を踏まえると、いつ、誰が被害者や加害者になってもおかしくないという事実を受け入れ、全ての児童生徒を対象に「未然防止」に取り組むことが適切かつ効果的と言えます。

従前のような、一部の特別な児童生徒に注意を払う、一部の問題を抱えた児童生徒を早い段階で見つけ出す(=「早期発見」)等の取組では、効果は限定的なものにとどまることが予想されます。

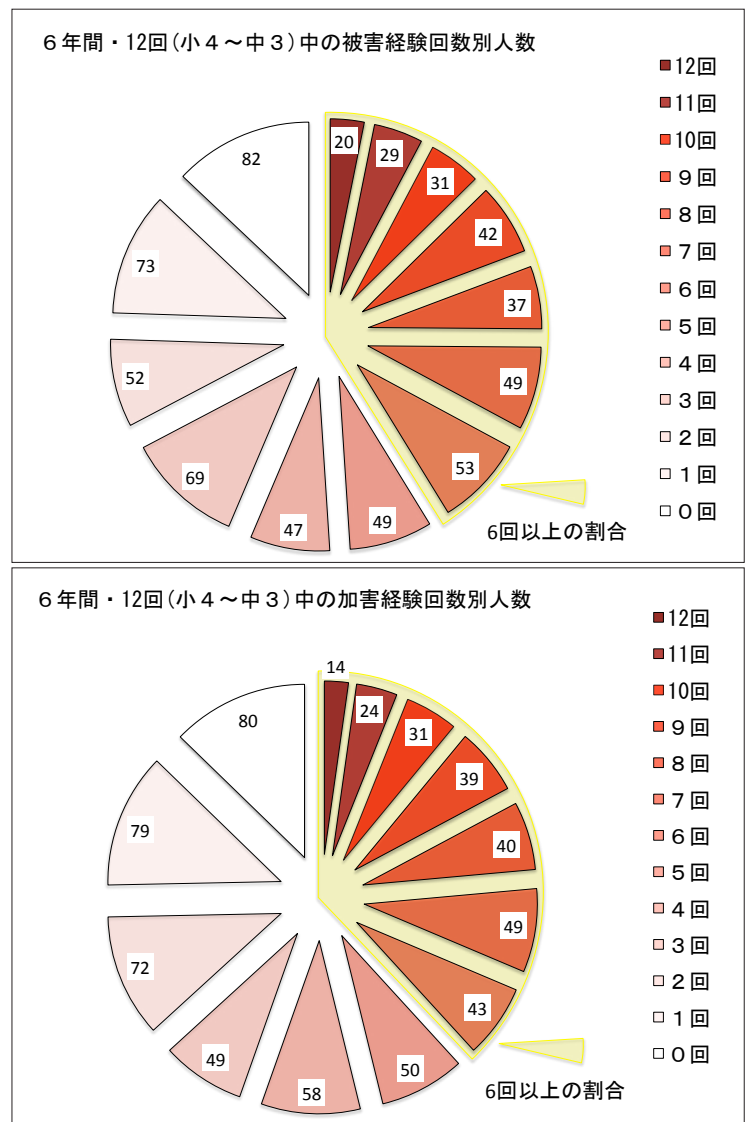


図8 2007年度小学4年生の6年間12回中の「仲間はずれ・無視・陰口」の経験回数(頻度を問わない)(被害・加害)

## 暴力を伴ういじめは、増えているのか？

Q 昨年（2012年）の夏の第4次社会問題化の際には、「暴力を伴ういじめ」についての報道が相次いだような印象を受けます。実際に、「暴力を伴ういじめ」というのは増えているのでしょうか。

A 結論から言えば、大きく増えているといった実態は確認できません。下の図9-1と図9-2は、2004年度から9年間分の「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」の中学校の経験率を示したものです。男子の場合、20.0%±5%程度で推移しています。全体を見ると2007～2009年が相対的に低かったことがわかりますが、「週に1回以上」に着目するとほとんど変わっておらず、むしろ2007～2009年よりも最近の1～2年の方が低い値を示しています。女子の場合、男子と比べるとはるかに少なく、大体7.1%±2%程度で推移しています。また、男子と同様、2007～2009年が相対的に低かったと言えます。ちなみに、小学校の被害経験率を見ると（図は省略）、男子では30.0%±4%の増減、女子では平均17.7%±3%の増減になります。

要するに、「暴力を伴ういじめ」が急増あるいは急減といった事実は見られません。マスコミ報道の多くがひどい暴力を伴う事案を中心に報道していたのは、そうしたいじめが多かったということではなく、そうしたいじめが「目に見えやすい」ことと、ニュースバリューが高いと判断したからではないかと考えられます。こうした「暴力を伴ういじめ」は「暴力を伴わないいじめ」と比べて「目に見えやすい」ことから発見しやすいのが特徴です。気付いた場合には速やかに対応することが必要です。（⇒国立教育政策研究所生徒指導・進路指導研究センター『生徒指導リーフ Leaf10 いじめと暴力』）

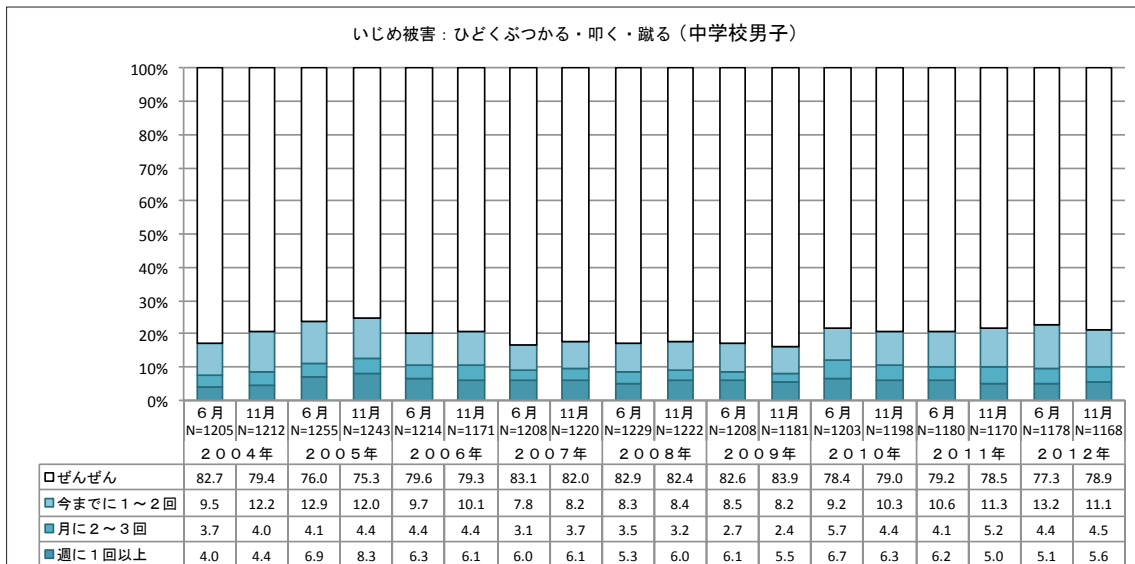


図9-1 中学生の「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」被害経験率の推移（男子）

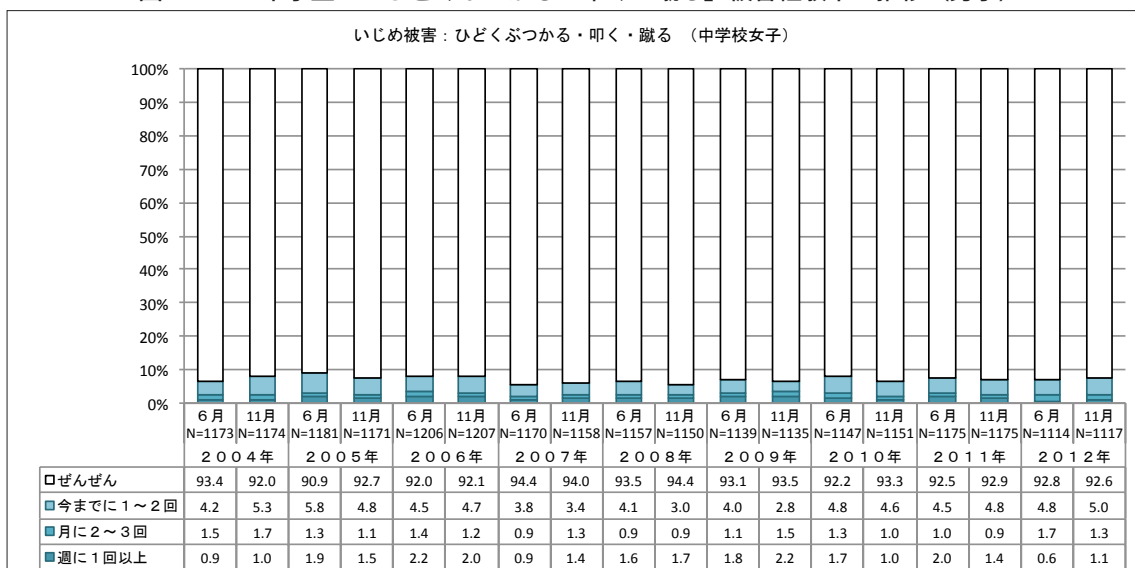


図9-2 中学生の「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」被害経験率の推移（女子）

## ■暴力を伴ういじめも、誰にも起きるのか？

Q 「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」のような「暴力を伴ういじめ」も、「仲間はずれ・無視・陰口」と同じように、どの子供にも起こりうるものなのでしょうか？

A 結論から言えば、必ずしも同じというわけではありません。「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」の場合、経験率そのものが相対的に低く、とりわけ女子ではかなり少ない数になります。また、被害を受ける児童生徒は不特定多数と考えられなくもありませんが、加害行為に向かう児童生徒については、ある程度限られてくるものと考えられます。すなわち、先生方が「気になる子」が該当する割合が高くなるものと予想されます。そうした実態を確認するために、「仲間はずれ・無視・陰口」のときと同じように、中学校の3年間や小学校からの6年間の推移を見ていきましょう。

最初に中学校について見てみます。男女差が大きいために、29ページや31ページのグラフからは男女あわせた全体像をイメージしにくいかも知れません。簡単に言うと、被害経験は中学1年生時には18.0%だったものが、中学3年生時には12.4%にまで減ります。平均は15.6%になります。加害経験は中学1年生時には13.0%だったものが、中学3年生時には8.9%にまで減ります。平均は11.2%です。

さて、被害経験と加害経験の中学校3年間の推移について示したのが図10です。被害経験では「週に1回以上」が6回継続した者は1名で、「ぜんぜんなかった」と答えた者が421名(59.5%)です。それに対して、加害経験では「週に1回以上」が継続した者は4回継続が1名、「ぜんぜんなかった」と答えた者が495名(70.1%)になります。このグラフからは、「週に1回以上」という高頻度の常習的な被害者や加害者はほとんどいないことが窺えます。また、平均経験率の2倍以上の広がりになる( $(100\% - 59.5\%) \div 18.0\% = 2.25$ 、若しくは $(100\% - 70.1\%) \div 11.2\% = 2.67$ )ことを考えると、「仲間はずれ・無視・陰口」と同様、かなりの入れ替わり(経験者の広がり)があるものと推測することができます。

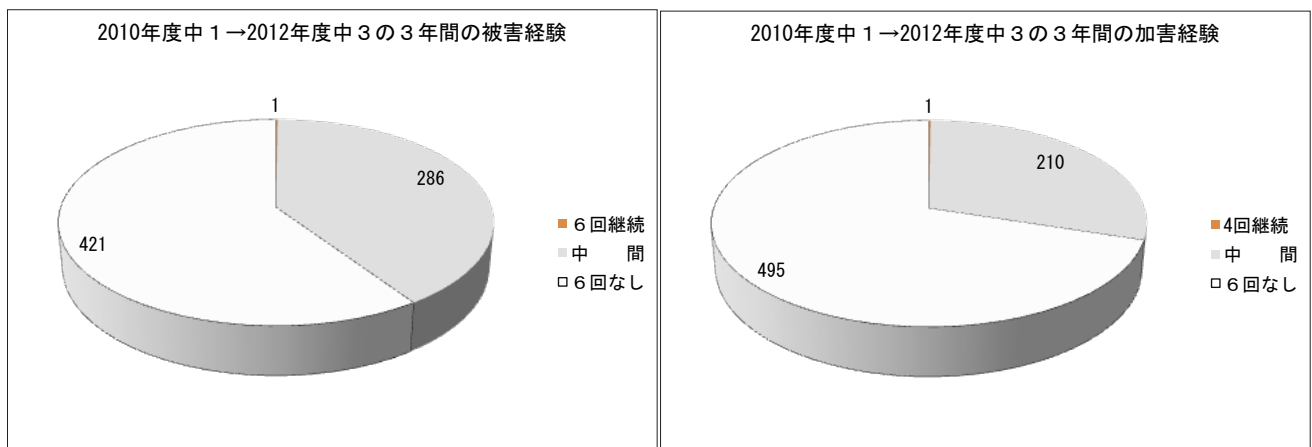


図10 2010年度中学1年生の3年間6回分の「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」経験(被害・加害)

ちなみに、小学4年生からの6年間12回で見た場合には、下の図11のようになります。小学校の場合には、被害経験は小学4年生時に29.7%だったものが小学6年生時には18.0%に減り、加害経験は小学4年生時に15.5%だったものが小

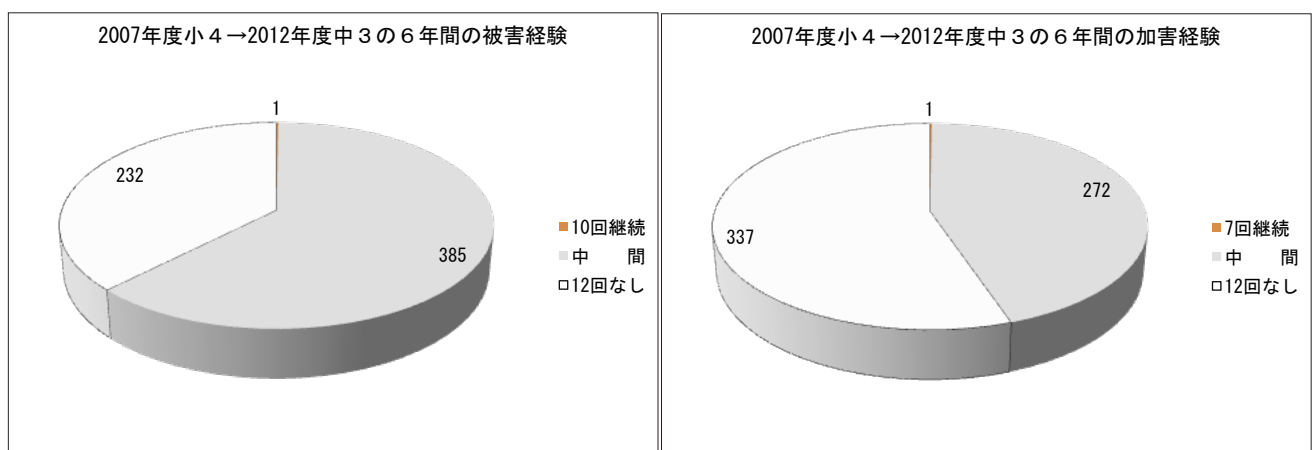


図11 2007年度小学4年生の6年間12回分の「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」経験(被害・加害)

学6年生時には10.9%に減ります。また、平均はそれぞれ22.3%と12.6%になります。このように小学校段階の経験率が高いことから、6年間ではかなりの広がりを見せます。とはいえ、被害経験の継続の最高は10回、加害経験の継続の最高は7回となっており、「暴力を伴う＝目に見えやすい＝大人が介入しやすい」という特徴を反映した結果になっているように見えます。つまり、広がりはあるもののトータルの回数は少なくなりやすい（広く浅く？）ということが考えられます。そのことをはっきり示すのが、図12に示した頻度の多少を問わない被害経験と加害経験の回数の分布です。

図12は、「仲間はずれ・無視・陰口」の場合（10ページの図8）とは大きく異なる分布を示しています。「仲間はずれ・無視・陰口」の場合、被害経験にしる加害経験にしる、経験者の占める割合が9割近くにまでなるばかりでなく、12回中1回から12回までの経験者があたかも均等割りのように分布していました。特別な児童生徒が存在するというよりも、誰もがいつ被害や加害に巻き込まれてもおかしくない、特別な児童生徒だけの問題と考えることは困難な分布でした。

ところが、図12からわかるとおり、「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」の場合には、広がりこそあるものの、その多くは少ない回数の経験者になります。つまり、被害経験にしる加害経験にしる、1回から12回までの全経験者の半数は2回以下の経験者なのです。反対に、12回とか11回という何度も継続しているものの数は非常に限られており、12回から6回までの経験者（図中の網掛け部分）を合わせてみても、被害経験で11%、加害経験では6%以下にしかありません。つまり、一部の者だけが何度も繰り返し経験する一方で、多くは数回程度の経験にとどまるという実態があるのです。

ここまでの話をまとめると、次のように言えるでしょう。「暴力を伴ういじめ」や「暴力」の場合には、

- ・被害経験者や加害経験者はそれなりの広がりを持ちはするものの、「誰にでも」、あるいは「誰でも」というわけではない。
- ・多くの場合、何回も継続する・繰り返すのではなく、（大人の介入の効果もあってか）一過性のものとして終わる可能性が高い。
- ・その一方で、限られた一部の者については、何回も継続したり繰り返したりすることが確認されており、（大人の介入があったとしても）やめさせにくい。

と、考えられます。

要するに、「暴力を伴ういじめ」や「暴力」の場合、行為が「目に見えやすい」ということもあり、教師が認知できる場合が少なくないと考えられます。中でも特に何度も繰り返されるものについては認知されやすく、教師の側も「気になる子」のいじめとして対応しようとしてきたと考えられます。

しかし、そうした「暴力を伴ういじめ」や「暴力」に対応できていることをもって、「目に見えにくい」いじめ、例えば「仲間はずれ・無視・陰口」のようないじめに対しても十分に対応できているものと勘違いしてはなりません。両者は、同じように「いじめ」と呼ばれていたとしても、異質なものであり、どの子供にも起こりうるいじめと、一部の「気になる子」が中心になるいじめとは、異なる対応が求められるのです。

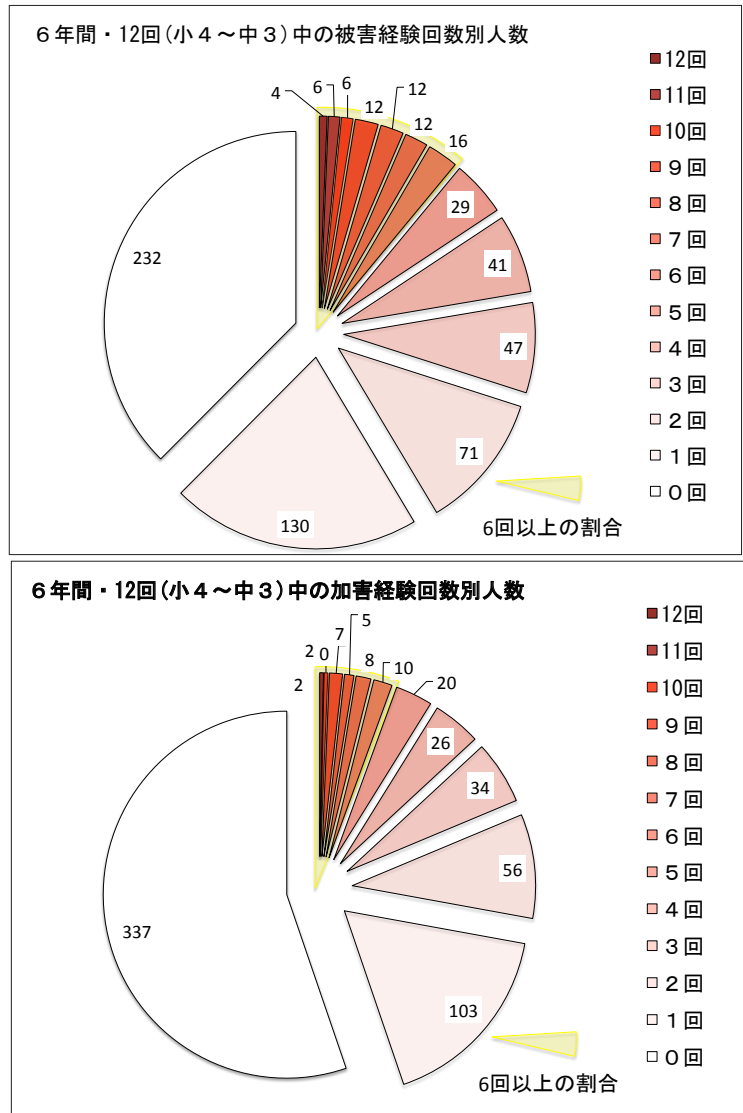


図12 2007年度小学4年生の6年間12回中の「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」の経験回数（頻度を問わない）（被害・加害）

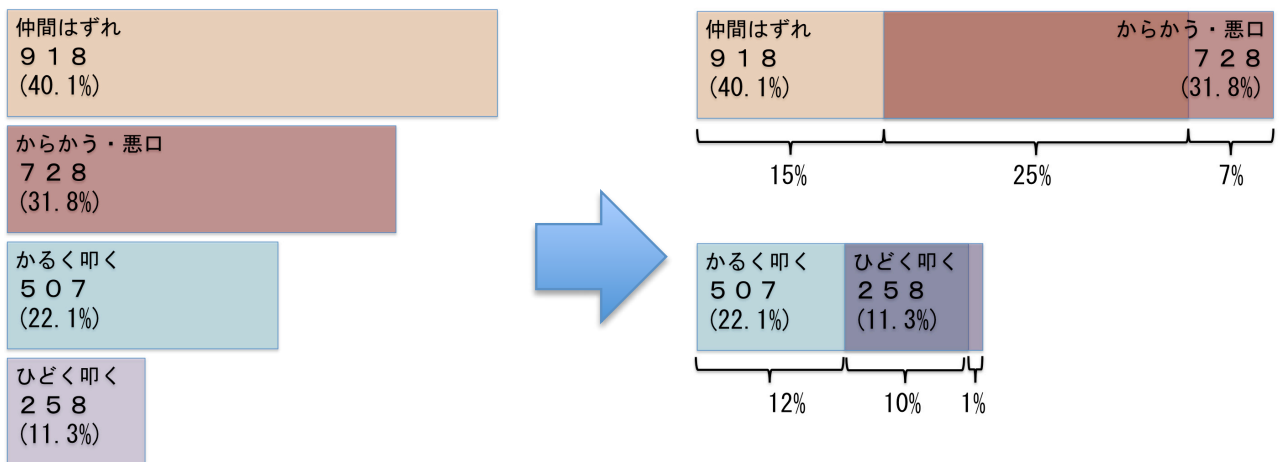
■いじめのタイプ間には、どのような重なりがあるのか？

Q 「暴力を伴ういじめ」と「暴力を伴わないいじめ」の発生実態には違いがあること、そのため対応の仕方や取り組み方にも違いが必要ということは分かりました。しかし、両者はきちんと分けられるものなのでしょうか？

A いじめは「どの子どもにも起こりうる」わけですから、どの子供も被害者や加害者として巻き込まれます。つまり、教師が「気になる子」や、問題を抱えた特別な児童生徒も、当然のことながら、いじめに巻き込まれていくということです。ところが、それを見た教師は、彼らが「気になる子」や問題を抱えた特別な児童生徒だからいじめに巻き込まれるのだと勘違いしてしまいます。実際には、それ以外の児童生徒も巻き込まれているのに、そのことには気付かずに、「気になる子」や問題を抱えた特別な児童生徒にばかり目が向くためです。そして、一生懸命に彼らをケアしようとしたり、彼らの問題に早い段階で気付こうと努力したり、そうした児童生徒を早期に発見したいと考えたりしていくこととなります。

しかも、厄介なことに、「暴力を振るう」児童生徒がいじめを行う場合には、「暴力を伴ういじめ」だけでなく「暴力を伴わないいじめ」も行うということです（下の図 13 参照）。その結果、いじめと暴力を混同したり、一緒に論じようとしてしまいます。例えば、いじめ対策と称して乱暴な児童生徒に対するケアを中心に据えた取組を考えたりするので。

「暴力を伴ういじめ」については「目に見えやすい」ので、気付いた時点で速やかに対応する「早期対応」が何よりも求められます。それがいじめのエスカレートを防ぎます。必要なら、警察等に相談しましょう。一方、「暴力を伴わないいじめ」、つまり「目に見えにくい」ものに関しては、全ての児童生徒を対象とした「未然防止」が最も有効です。常習性が低く、入れ替わりながら誰もが巻き込まれる実態を考えれば、「発見してから対応」という発想では後手に回りかねません。明日起きるいじめの被害者が誰になり、加害者が誰になるのかは、全くわからないと考えて取組を行うべきなのです。ちなみに、「未然防止」の取組や警察等との連携に関しては、私どもが発行している『生徒指導リーフ』が参考になります。



- ※ 2012 年の中学生 2292 名の 6 月時点のデータから作成
- ※ 左上に示されているのは、主要ないじめ行為の加害経験者の実数と経験率
- ※ 右上は、暴力を伴わない「仲間はずれ・無視・陰口」と「からかう・悪口」の重なりと、暴力を伴う「かるくぶつかる・叩く・蹴る」と「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」の重なりと、おおまかな比率を示す
- ※ 右は、上記四つの重なりと、主な類型の比率を示す
- ※ 「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」の加害経験者は、ほぼ全員が「かるくぶつかる・叩く・蹴る」を行い、更に大半が「仲間はずれ・無視・陰口」や「からかう・悪口」も行う

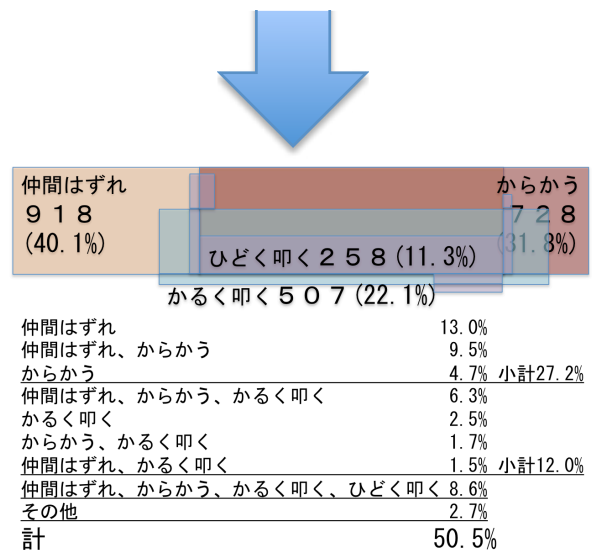


図 13 いじめタイプの重なり（加害経験）  
（2012 年度 6 月中学生）

## 調査の概要

### ○調査の時期、サンプル、実施方法

#### 調査の時期

6月末と11月末の年に2回、新学期が始まってから（若しくは、夏休みが明けてから）3か月弱の時期に揃<sup>そろ</sup>えています。ただし、同一日を指定しているわけではなく、学校間で若干の幅があります。

#### 調査地点・対象校

この調査は、1回限りのものではなく、また単に複数回の調査を繰り返すというものでもありません。匿名性を維持しつつ、個人を特定できる形で数年にわたって（小学校から中学校にかけて）追跡していくことを目的としています。それを可能にするためには、調査単位は中学校区（区内の小中学校全て）である必要があります。その場合、調査の客観性や代表性を保つ目的で一般に用いられるサンプリング調査の手法を用いたのでは、膨大な数の児童生徒を扱わねばならないこととなります。そこで、日本全体の状況を推測する際の根拠となりうる地点（大都市近郊にあり、住宅地や商業地のみならず、農地等も域内に抱える地方都市）を選び、その市内にある全ての小学校（13校）と中学校（6校）を対象校としています。

#### 対象児童生徒

小学校4年生から中学校3年生までの全児童生徒が対象です。1学年当たりの児童生徒数は、学年や年度によって異なりますが、概<sup>おおむ</sup>ね800名前後で、大きな変動はありません。また、私立中学校への進学も僅かですので、ほぼ市内全域の児童生徒を網羅していると考えられます。

#### 調査の実施

学級単位で一斉に行います。この調査自体は、個々の児童生徒の変容を追跡できるように記名式で行われていますが、教師や友人の目を意識して回答をためらうことのないよう、調査票の配付時にシール付きの封筒を配付し、回答後は各自で速やかに封入できるような配慮を行い、回答の精度を上げるように配慮されています。ほとんどの児童生徒が小学校4年生のときからこの調査を体験済みですので、小学校の高学年以降になっても、この調査票に本当のことを答えても不都合は生じない（叱られたりはしない）という安心感の下に回答していることが期待できます。

#### 質問項目

いじめに関する内容のほか、学校や集団への適応感、ストレス、ストレスをもたらす要因、相談相手の有無等が含まれています。下に示したのは、いじめの被害経験を尋ねる項目です。

### ○調査票のいじめに関する項目

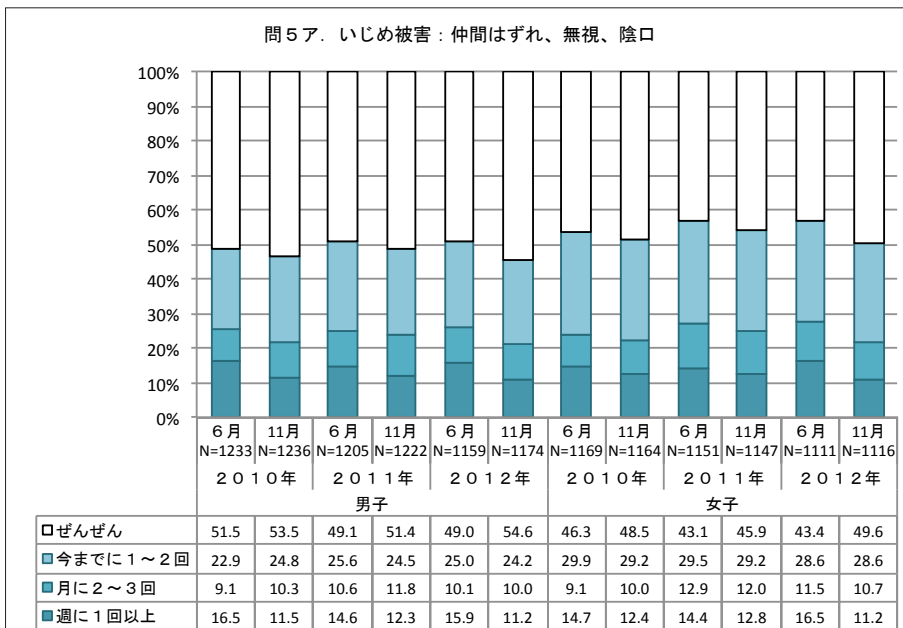
皆さんは、学校の友だちのだれかから、いじわるをされたり、イヤな思いをさせられたりすることがあると思います。

そうしたいじわるやイヤなことを、みんなからされたり、何度も繰り返されたりすると、そうされた人はどうしてよいかわからずにとても苦しい思いをしたり、みんなの前で恥ずかしい目にあわされてつらい思いをしたりします。

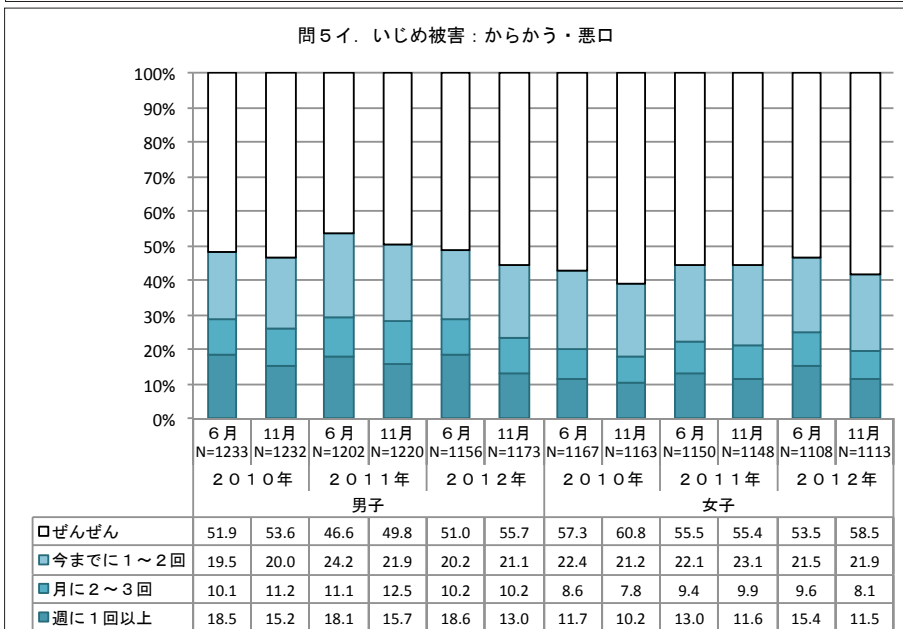
これから皆さんに質問するのは、そうしたいじわるやイヤなことを、むりやりされた体験や、反対に弱い立場の友だちにあなたがした体験についてです。

問5 いじわるやイヤなことには、いろいろなものがあります。あなたは、新学期になってから学校の友だちのだれかから、次のようなことをどのくらいされましたか。ア～カのそれぞれについて、一番近いと思う数字に、一つずつ○をつけていってください。

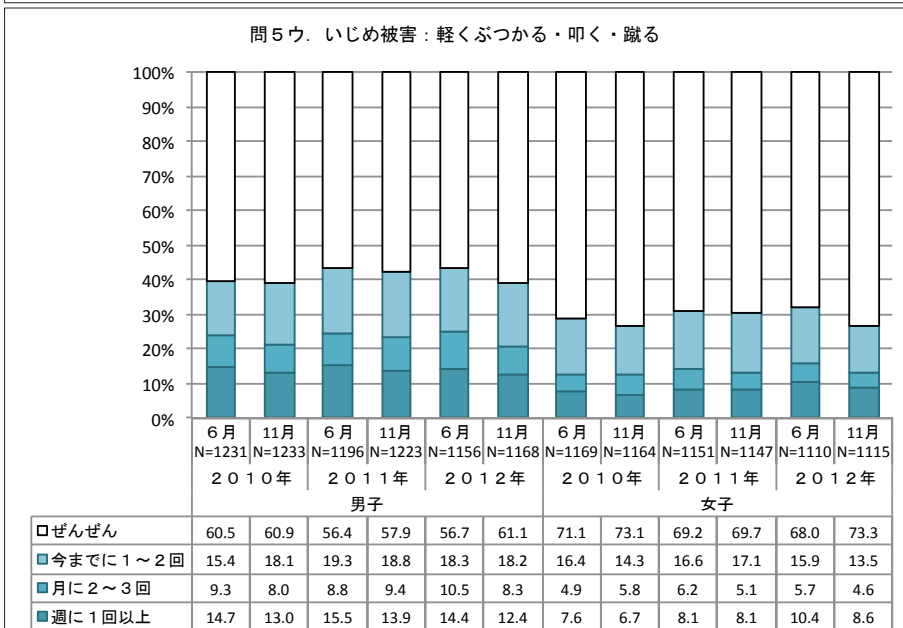
	1 週間に 何度も	1 週間に 1回 くらい	2 〜3 回に くらい	1 今 まで 2回 くらい	ぜん ぜん な か っ た
ア. 仲間はずれにされたり、無視されたり、陰で悪口を言われたりした	1	2	3	4	5
イ. からかわれたり、悪口やおどし文句、イヤなことを言われたりした	1	2	3	4	5
ウ. 軽くぶつかられたり、遊ぶふりをして叩 <sup>たた</sup> かれたり、蹴 <sup>け</sup> られたりした	1	2	3	4	5
エ. ひどくぶつかられたり、叩 <sup>たた</sup> かれたり、蹴 <sup>け</sup> られたりした	1	2	3	4	5
オ. お金や物を盗 <sup>と</sup> られたり、壊 <sup>こわ</sup> されたりした	1	2	3	4	5
カ. パソコンや携帯電話で、イヤなことをされた	1	2	3	4	5



○「仲間はずれ・無視・陰口」  
男女ともに被害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。  
この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の被害は男女とも2011年夏と2012年夏が相対的に高かったことが分かります。頻度の高い加害に着目すると、男子は2010年夏と2012年夏、女子は2012年夏が高かったと言えます。



○「からかう・悪口」  
男女ともに被害経験率は高いですが、やや男子に多い傾向が窺えます。  
この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の被害は男子では2011年夏、女子では2012年夏が相対的に高かったことが分かります。頻度の高い被害に着目すると、男子は2010年夏と2012年夏、女子は2012年夏が高かったと言えます。



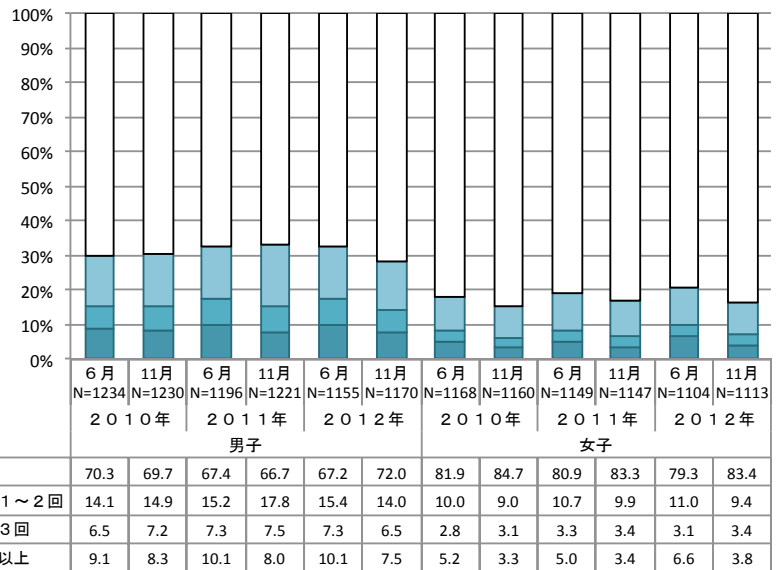
○「軽くぶつかる・叩く・蹴る」  
日本の場合、3番目に被害経験率が高い行為ですが、ほかの国では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。  
男子に多い傾向が窺えます。  
この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の被害は男子では2011年夏から2012年夏にかけて、女子も同じ時期が相対的に高かったことが分かります。頻度の高い被害に着目すると、男子は2011年夏、女子は2012年夏が高かったと言えます。

○「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」

男女ともに被害経験率は低い方ですが、男子に多い傾向が窺えます。

この3年間に大きな変動はありませんが、全体の被害は男子では2011年夏から12年夏、女子では2012年夏が相対的に高かったことがわかります。頻度の高い被害に着目すると、男子は2011年夏と2012年夏、女子は2012年夏が高いと言えます。

問5エ. いじめ被害：ひどくぶつかる・叩く・蹴る

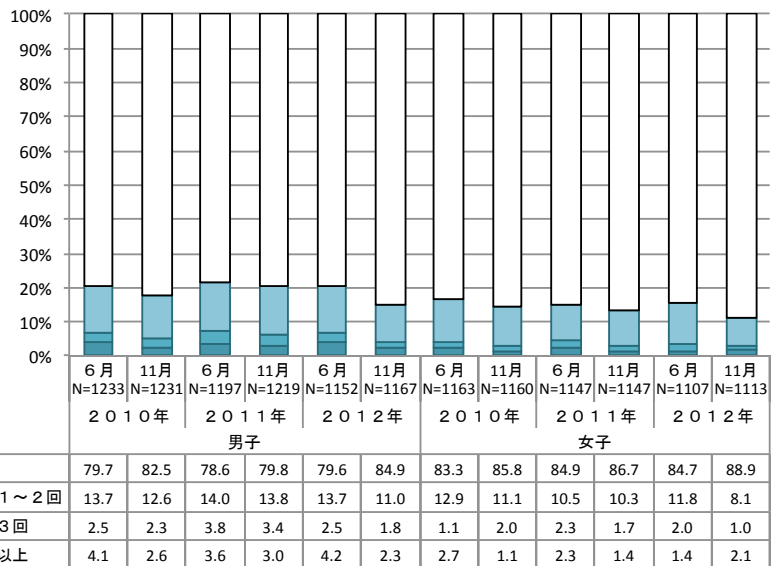


○「金銭強要・器物損壊」

男女ともに被害経験率は低い方の項目ですが、やや男子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、男子では2010年秋、2012年秋が、全体でも頻度の高い被害でも相対的に低かったことがわかります。女子では全体は2012年秋、頻度の高い被害は2010年秋が相対的に低かったと言えます。

問5オ. いじめ被害：金銭強要・器物損壊

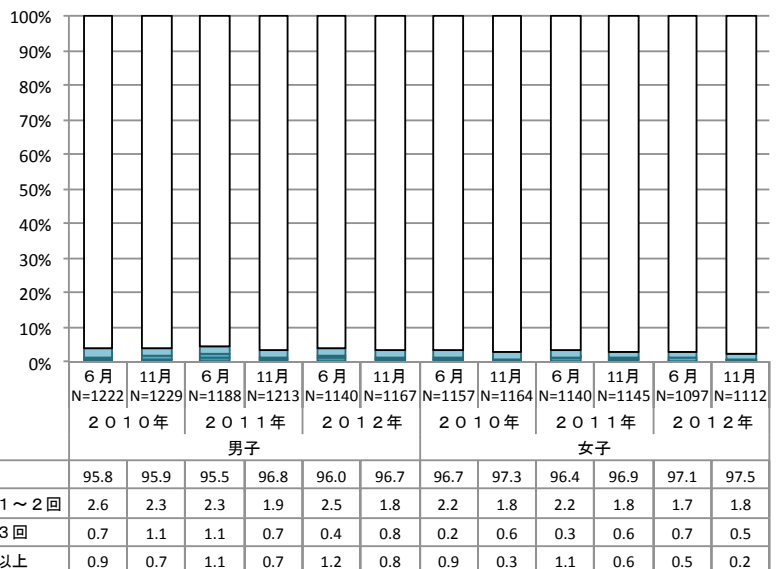


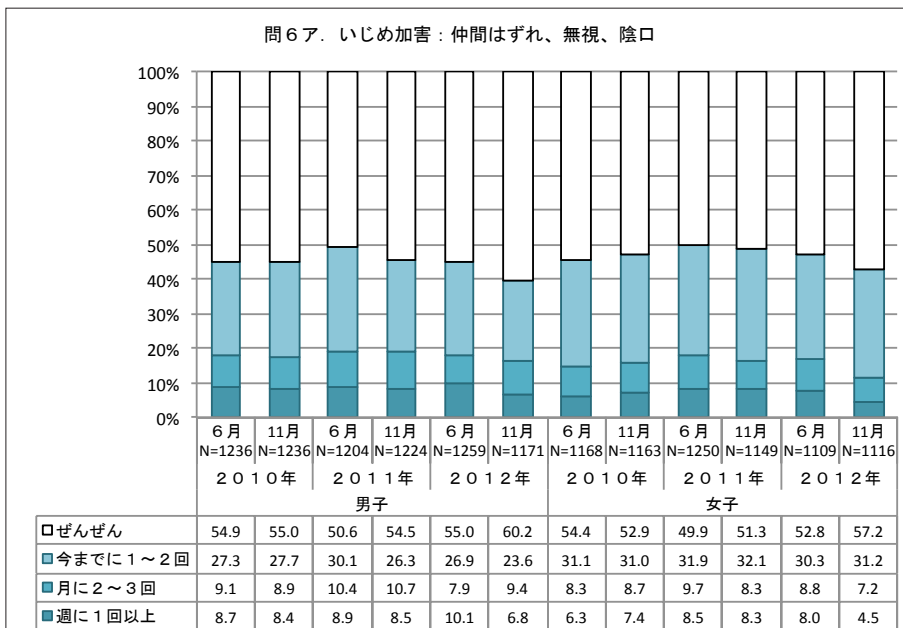
○「パソコン・携帯」

男女ともに、最も被害経験率が低い行為です。

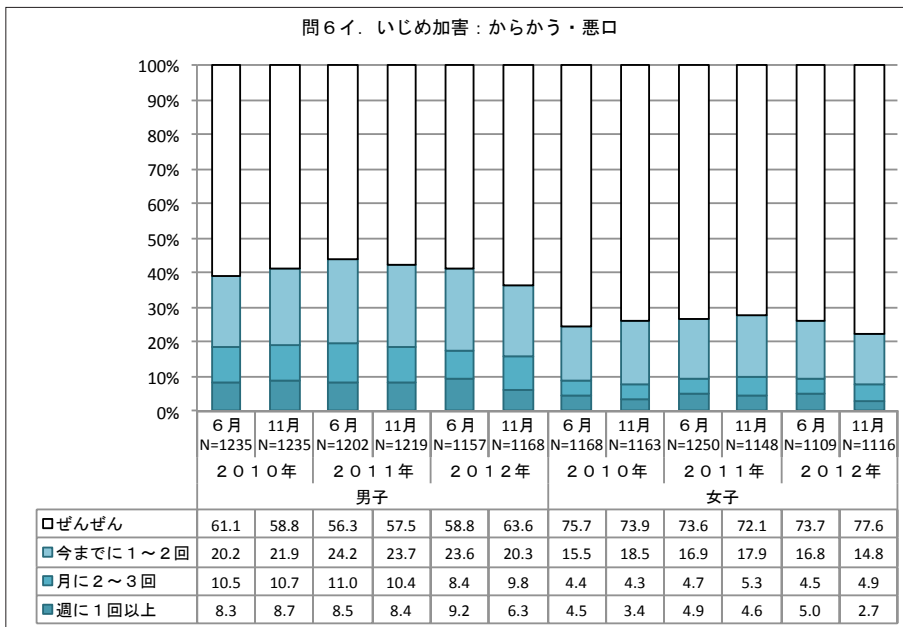
この3年間に大きな変動はありません。

問5カ. いじめ被害：パソコン・携帯

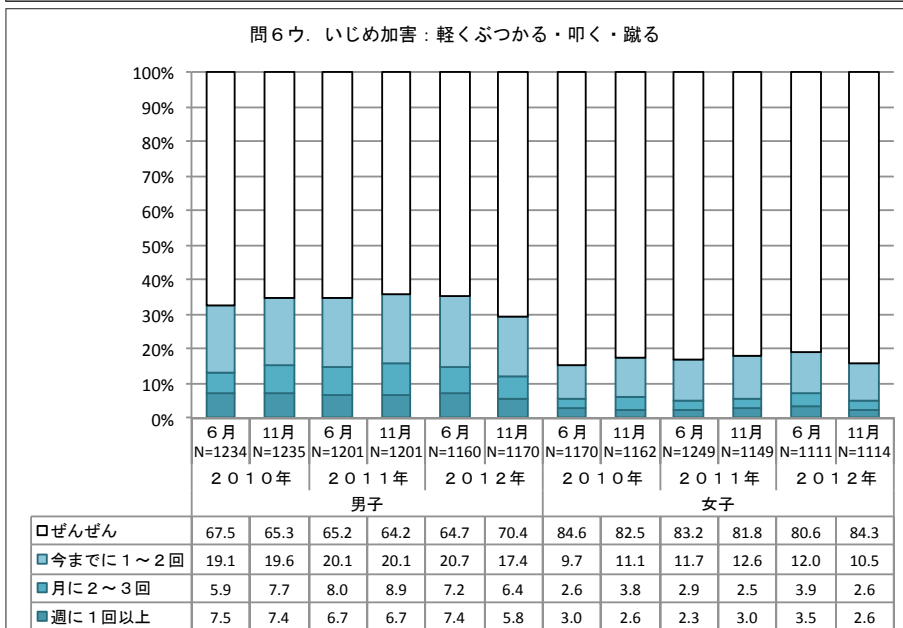




○「仲間はずれ・無視・陰口」  
男女ともに加害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。  
この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の加害は男女とも2011年夏と2012年夏が相対的に高かったことが分かります。頻度の高い加害に着目すると、男子は2012年夏が高かったと言えます。女子は2012年秋が低かったと言えます。



○「からかう・悪口」  
男女ともに加害経験率は高いですが、男子に多い傾向が窺えます。  
この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の加害は男子では2011年夏、女子では2011年秋が相対的に高かったことが分かります。頻度の高い加害に着目すると、男女ともに2012年夏が高かったと言えます。

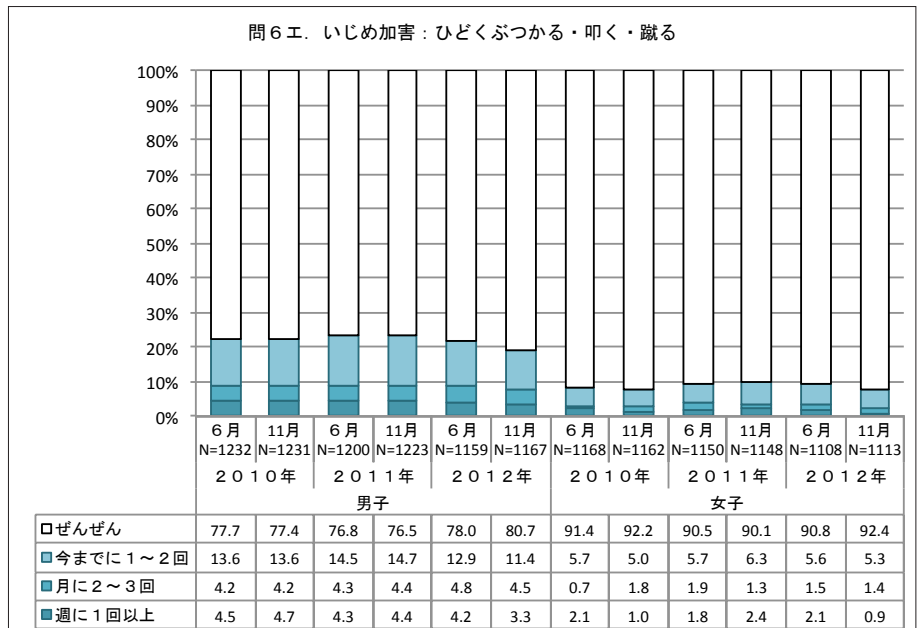


○「軽くぶつかる・叩く・蹴る」  
日本の場合、3番目に加害経験率が高い行為ですが、ほかの国では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。  
男子に多い傾向が窺えます。  
この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の加害は男子では2010年秋から2012年夏にかけて、女子もほぼ同じ時期が相対的に高かったことが分かります。頻度の高い加害に着目すると、男子は2010年夏、女子は2012年夏が高かったと言えます。

○「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」

男女ともに加害経験率は低い方ですが、男子に多い傾向が窺えます。

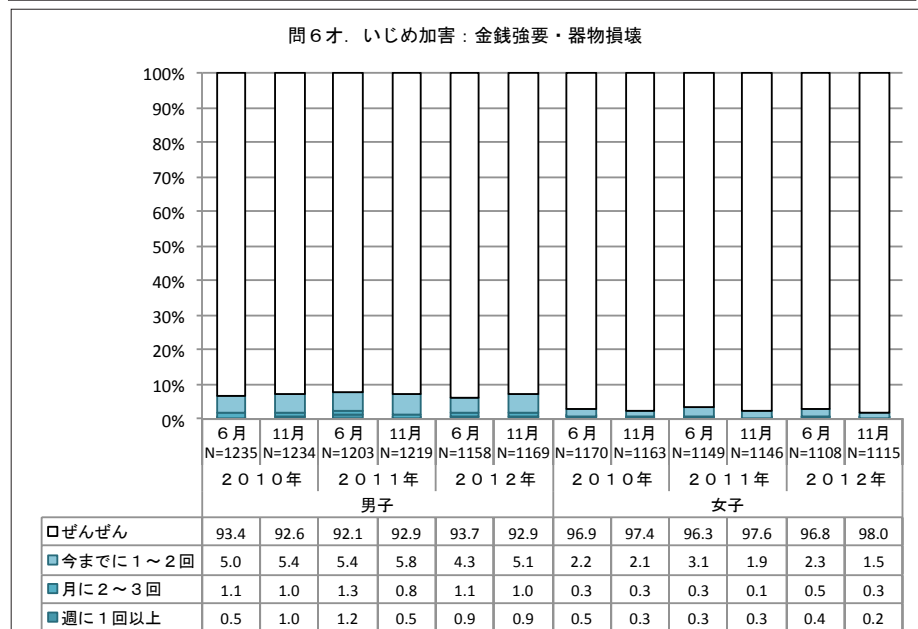
この3年間に大きな変動はありませんが、全体の加害は男子では2011年夏秋、女子でも同じ時期が相対的に高かったことが分かります。



○「金銭強要・器物損壊」

男女ともに加害経験率は低い項目ですが、男子に多い傾向が窺えます。

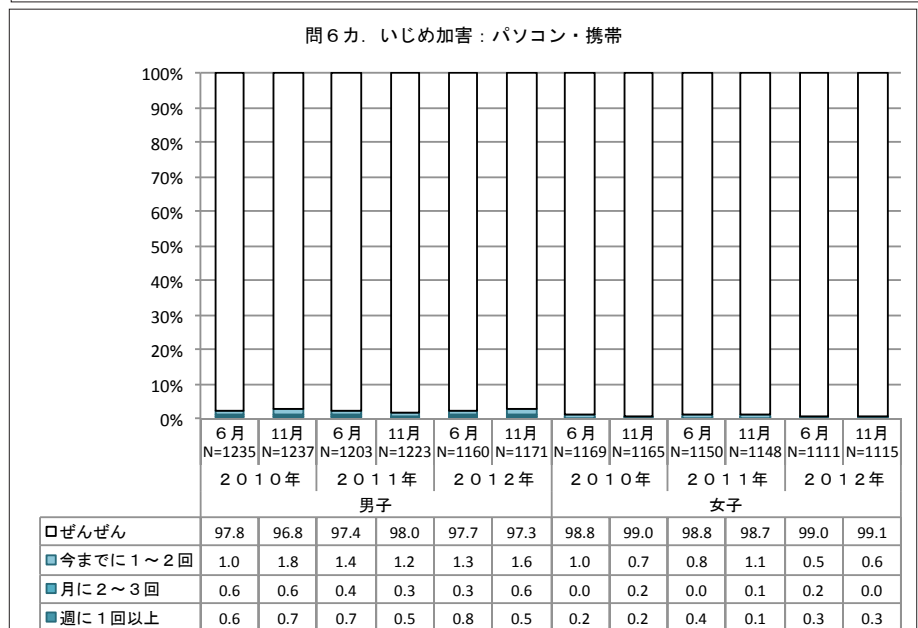
この3年間に、大きな変動はありません。



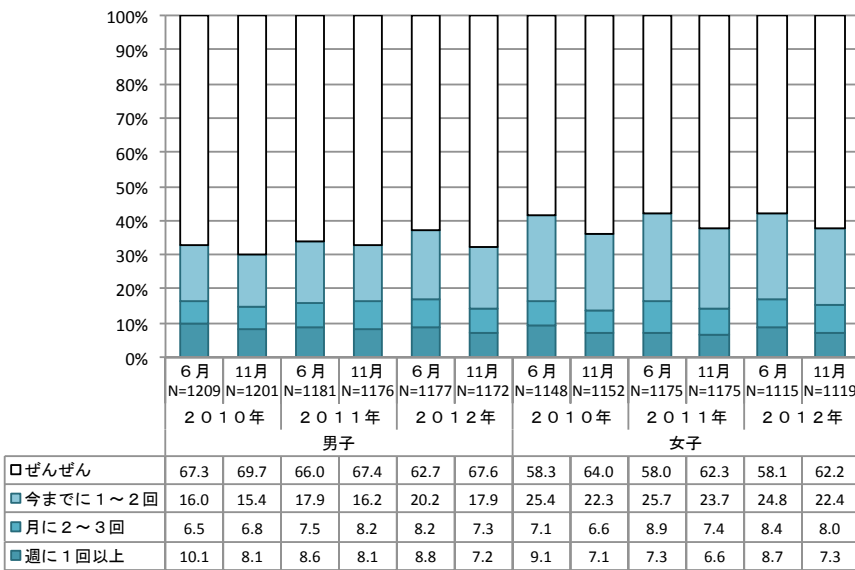
○「パソコン・携帯」

男女ともに、最も加害経験率が低い行為です。

この3年間に大きな変動はありません。



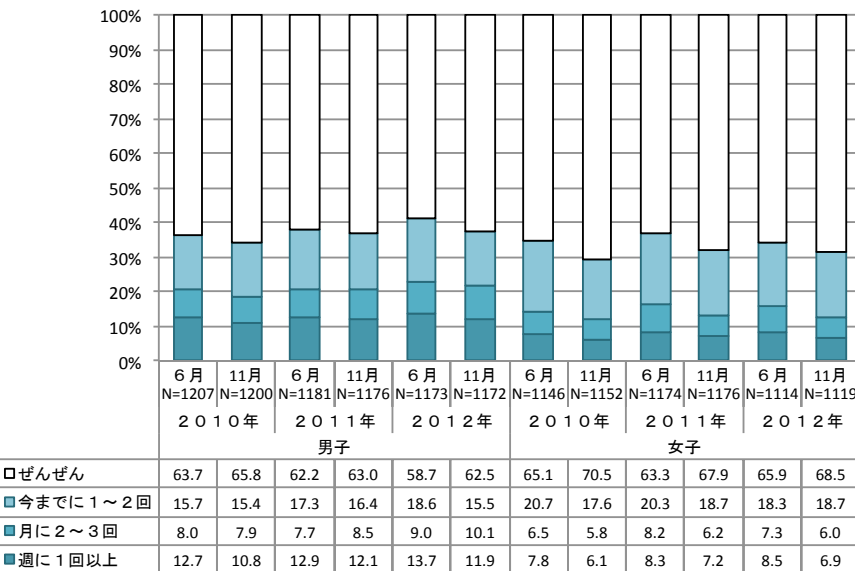
問5ア. いじめ被害：仲間はずれ、無視、陰口



○「仲間はずれ・無視・陰口」  
男女ともに被害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の被害は男子では2012年夏、女子では毎年夏が相対的に高かったことがわかります。頻度の高い加害に着目すると、男女ともに2010年夏が高かったと言えます。

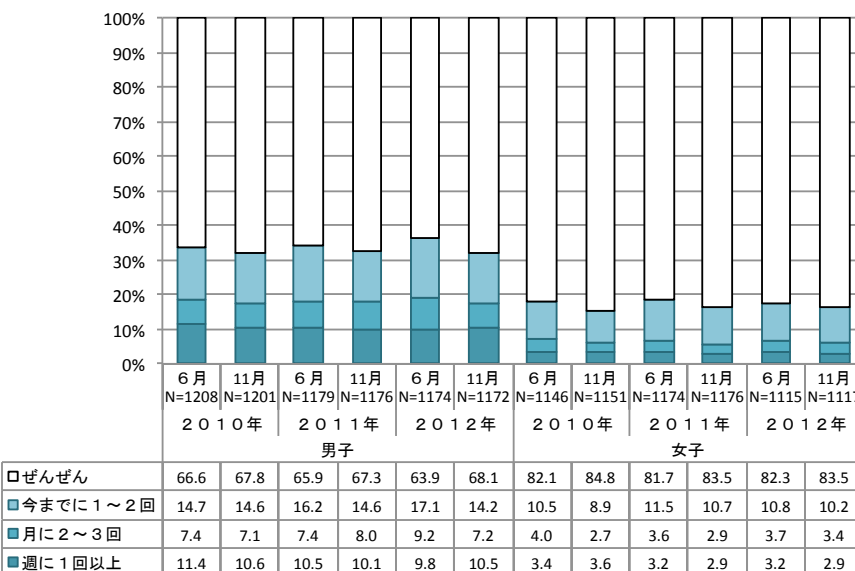
問5イ. いじめ被害：からかう・悪口



○「からかう・悪口」  
男女ともに被害経験率は高いですが、やや男子に多い傾向が窺えます。

この3年間に、大きな変動はありませんが、男子は全体でも頻度の高い被害でも2012年夏、女子は全体でも頻度の高い被害でも2011年夏が相対的に高かったことがわかります。

問5ウ. いじめ被害：軽くぶつかる・叩く・蹴る



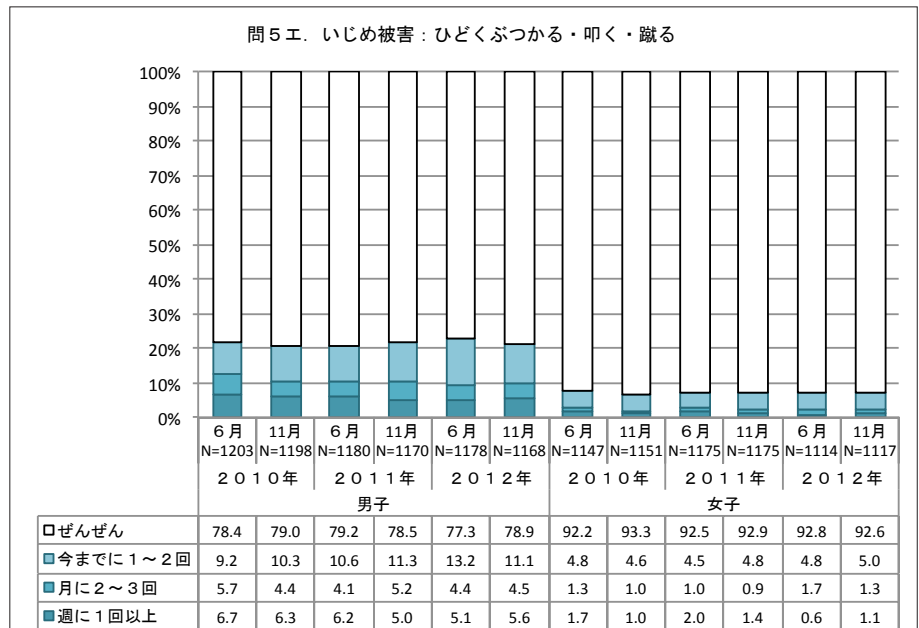
○「軽くぶつかる・叩く・蹴る」  
日本の場合、3番目に被害経験率が高い行為ですが、ほかの国では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。

男子に多い傾向が窺えます。  
この3年間に、大きな変動はありませんが、男子では全体の被害は2012年夏、頻度の高い被害は2010年夏が高かったことがわかります。女子では、余り大きな変動は見られません。

○「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」

男女ともに被害経験率は低い方ですが、男子に多い傾向が窺えます。

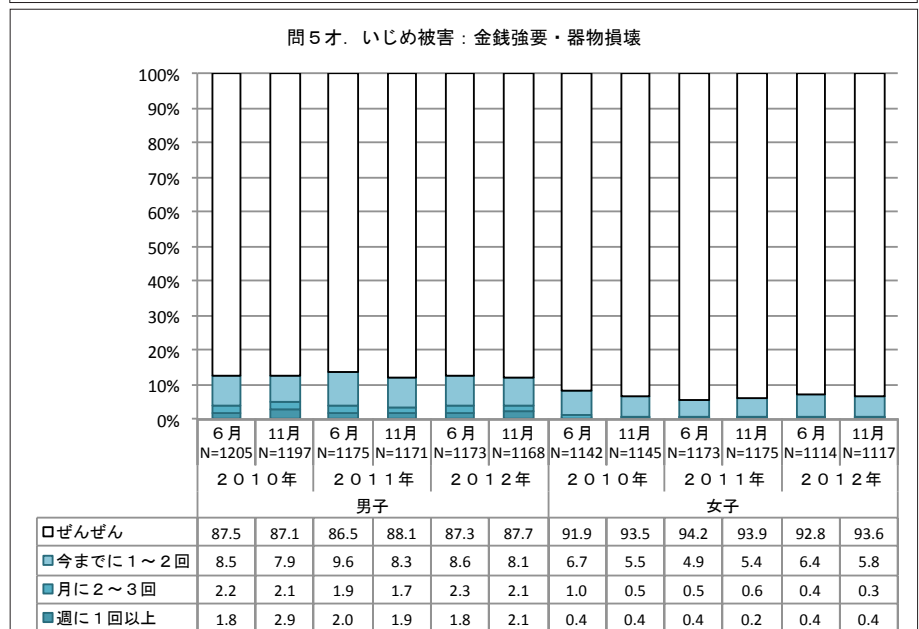
この3年間に、大きな変動はありません。



○「金銭強要・器物損壊」

男女ともに被害経験率は低い方の項目ですが、やや男子に多い傾向が窺えます。

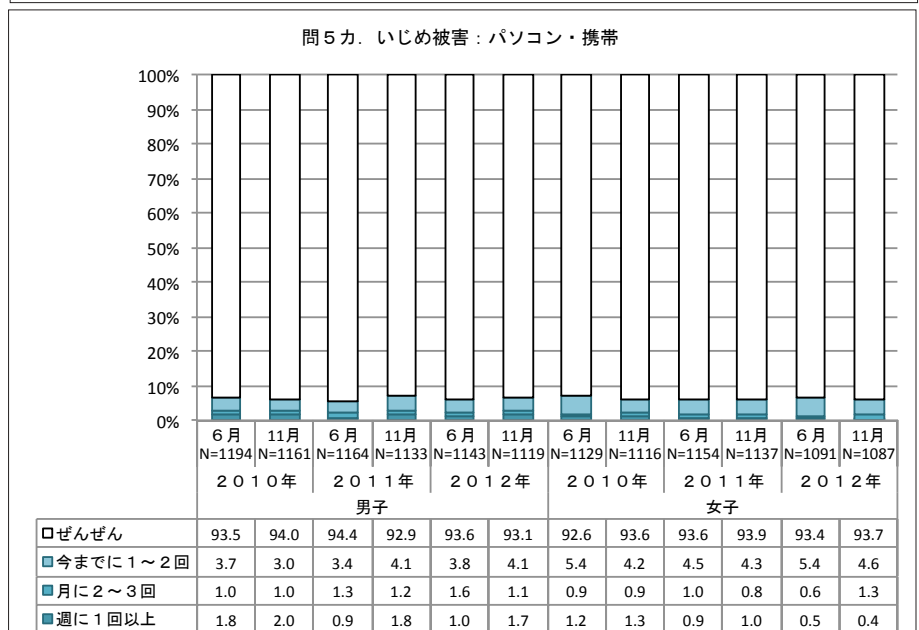
この3年間に、大きな変動はありません。

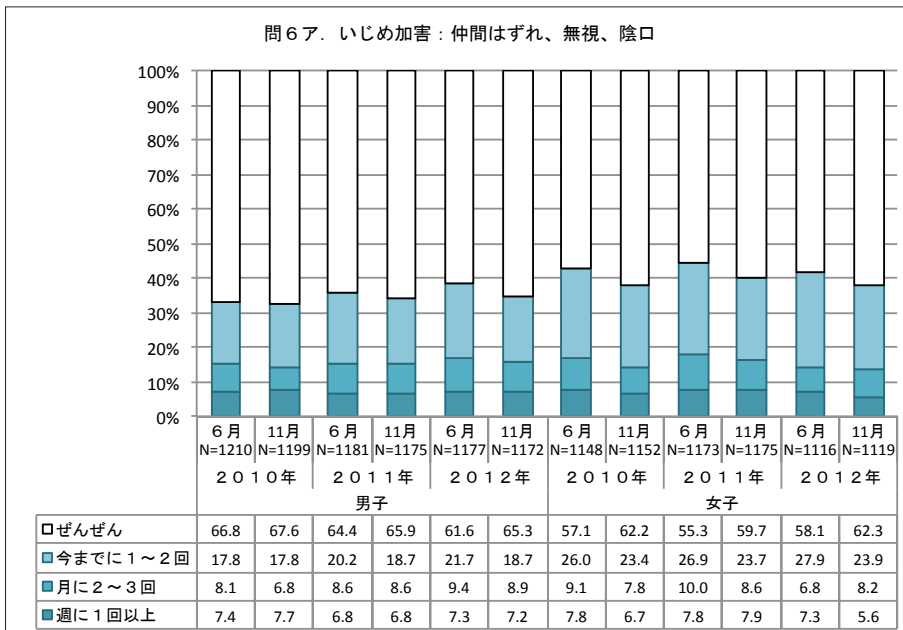


○「パソコン・携帯」

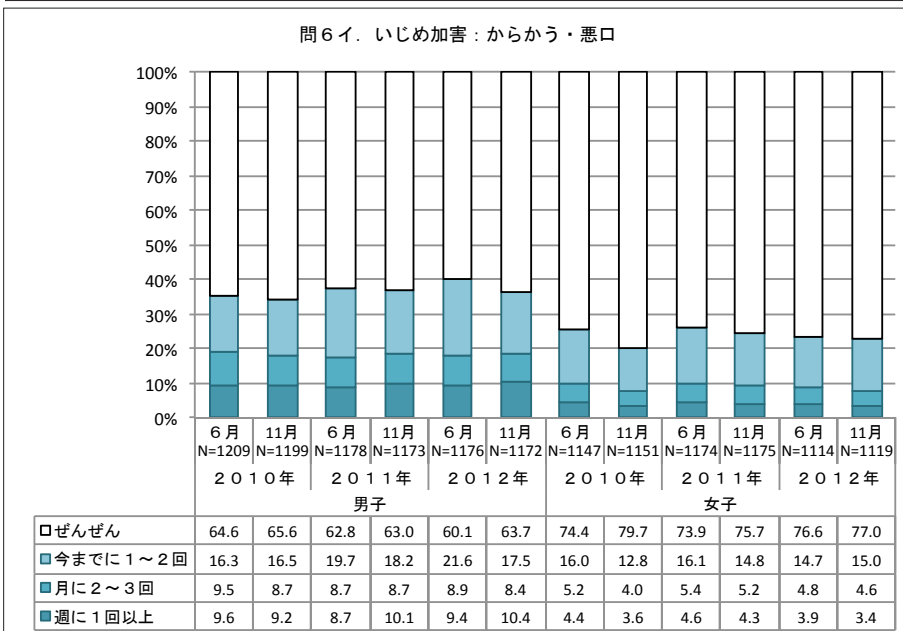
男女ともに、最も被害経験率が低い行為です。

この3年間に大きな変動はありません。

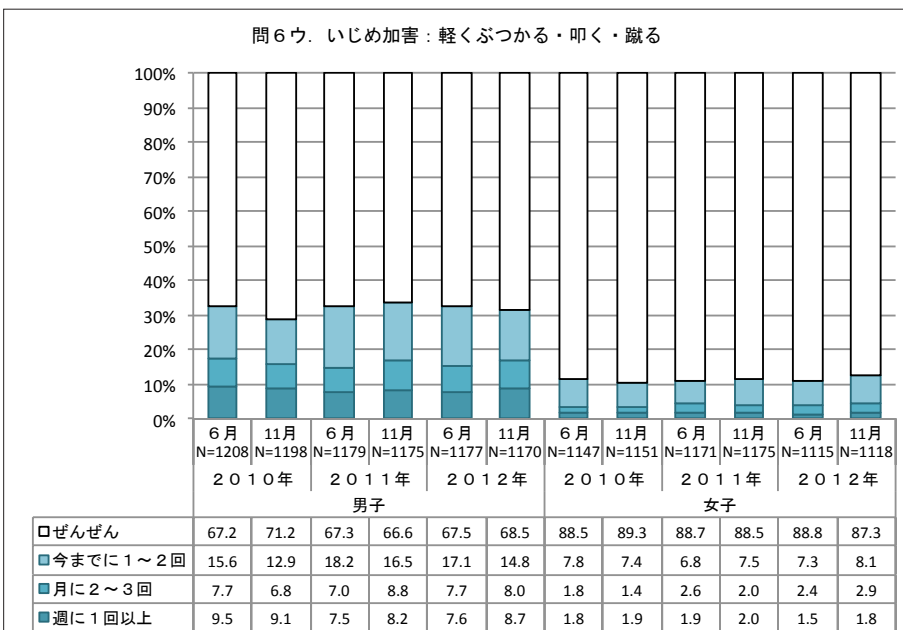




○「仲間はずれ・無視・陰口」  
男女ともに加害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。  
この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の加害は男子では2011年夏と2012年夏が、女子では2010年夏と2011年夏が相対的に高かったことがわかります。頻度の高い加害に着目すると、女子の2012年秋が低かったと言えます。



○「からかう・悪口」  
男女ともに加害経験率は高いですが、男子に多い傾向が窺えます。  
この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の加害は男子では2012年夏、女子では2010年夏と2011年夏が相対的に高かったことがわかります。

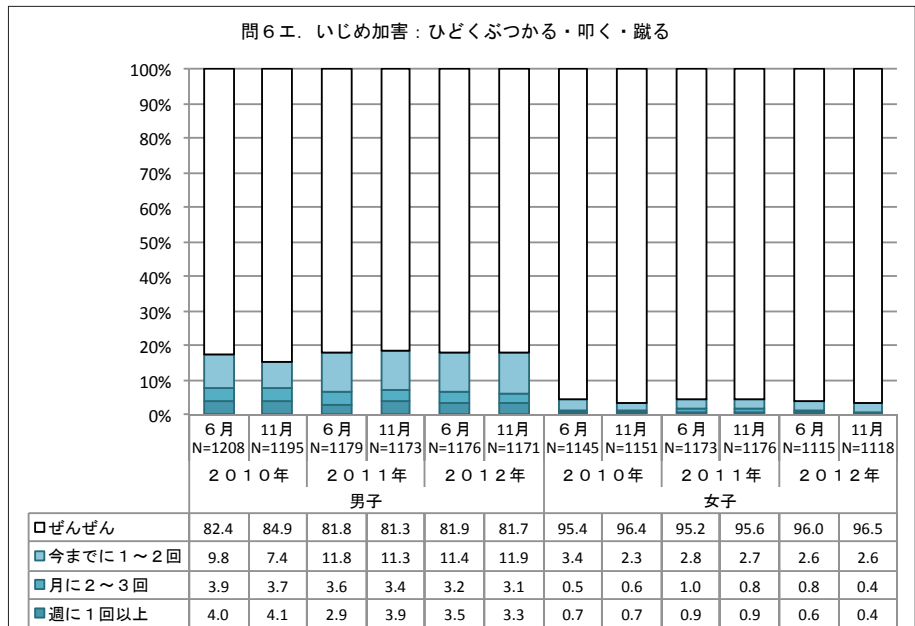


○「軽くぶつかる・叩く・蹴る」  
日本の場合、3番目に加害経験率が高い行為ですが、ほかの国では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。  
男子に多い傾向が窺えます。  
この3年間に、大きな変動はありませんが、全体の加害は男子では2010年秋が相対的に低かったことがわかります。

○「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」

男女ともに加害経験率は低い方ですが、男子に多い傾向が窺えます。

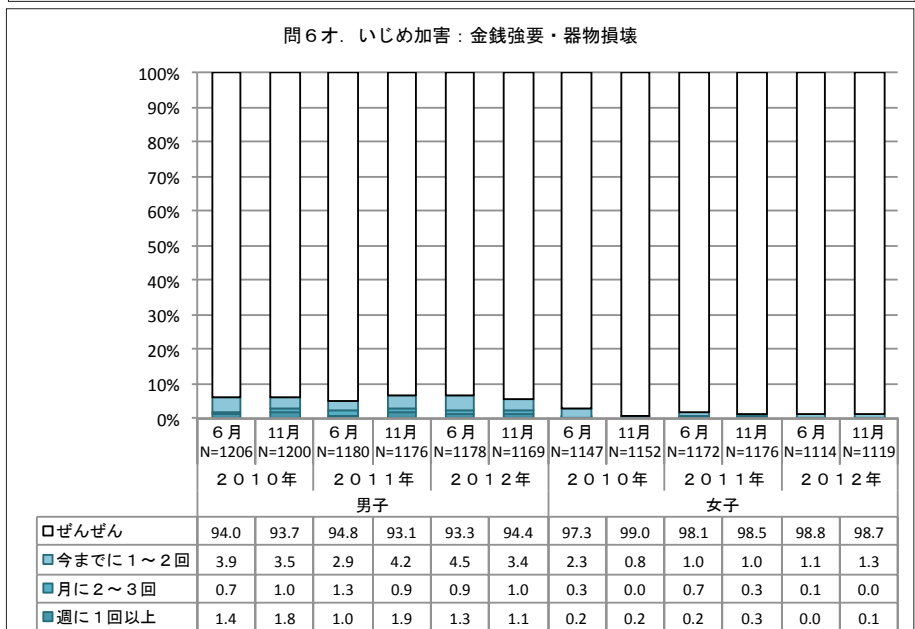
この3年間に大きな変動はありませんが、全体の加害は男子では2010年秋が相対的に低かったことが分かります。



○「金銭強要・器物損壊」

男女ともに加害経験率は低い項目ですが、男子に多い傾向が窺えます。

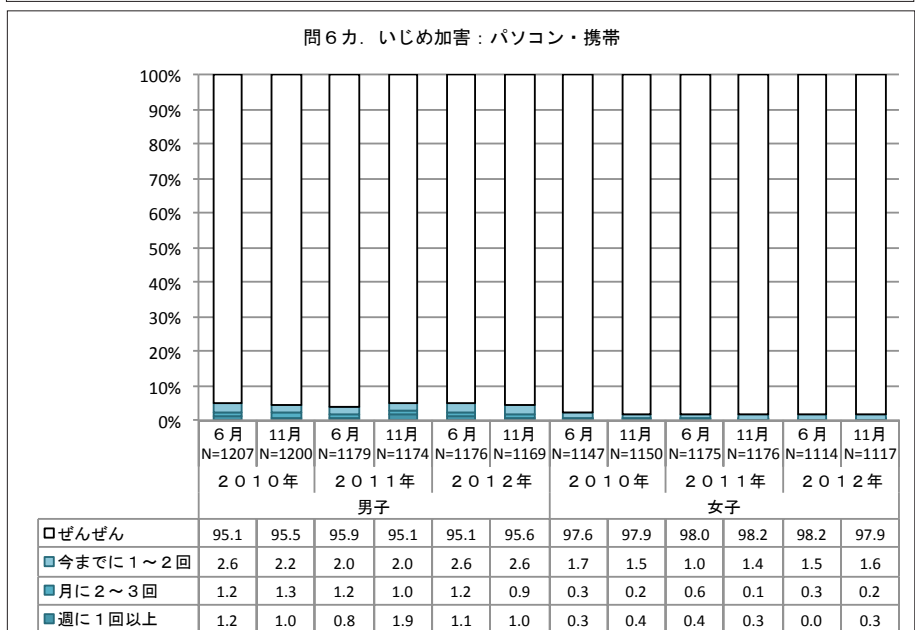
この3年間に、大きな変動はありません。

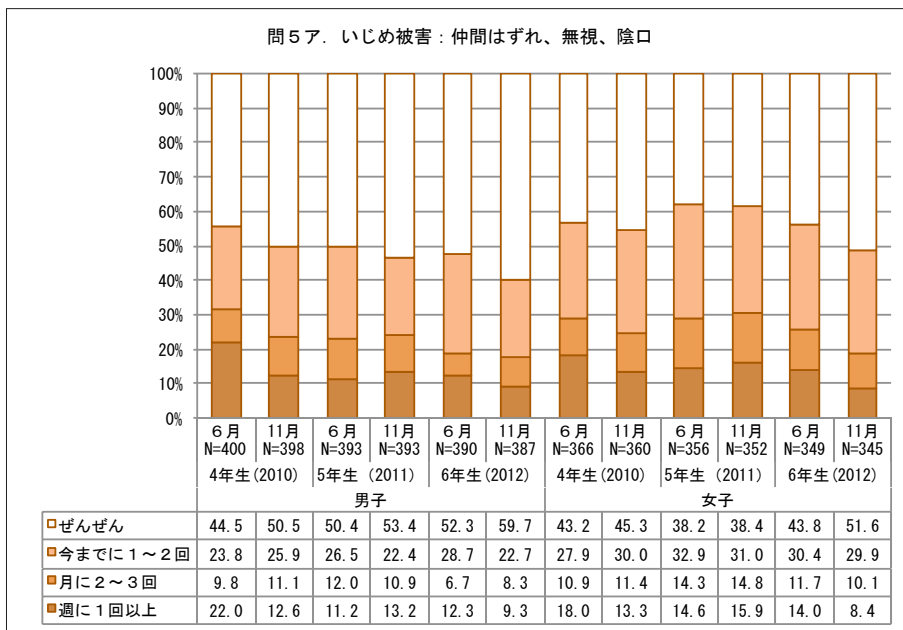


○「パソコン・携帯」

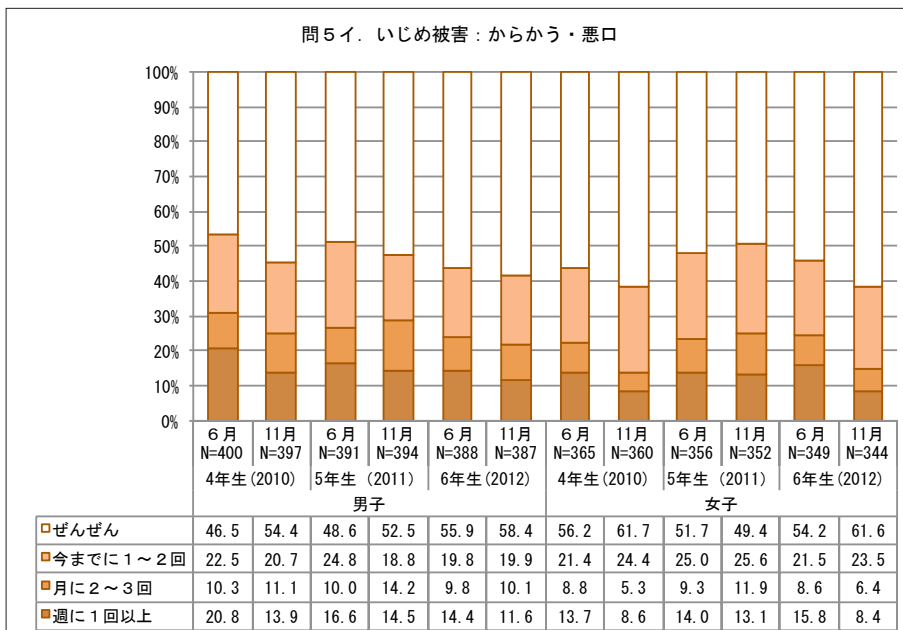
男女ともに、最も加害経験率が低い行為です。

この3年間に大きな変動はありません。

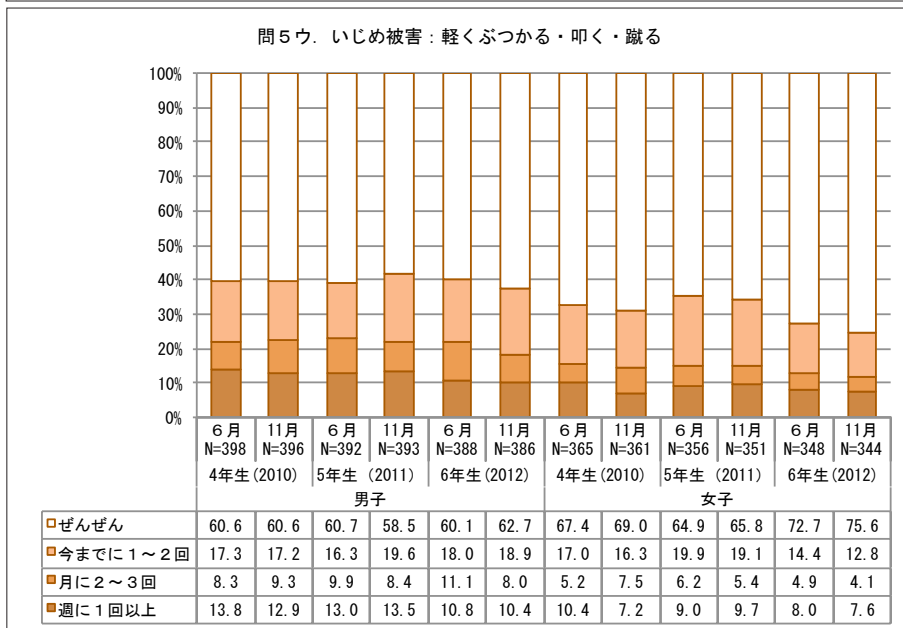




○「仲間はずれ・無視・陰口」  
 男女ともに被害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。  
 男子は4年生から6年生で減る傾向が窺えますが、女子は5年生がピークになります。



○「からかう・悪口」  
 男女ともに被害経験率は高いですが、やや男子に多い傾向が窺えます。  
 男子は4年生から6年生で減る傾向が窺えますが、女子は5年生がピークになります。

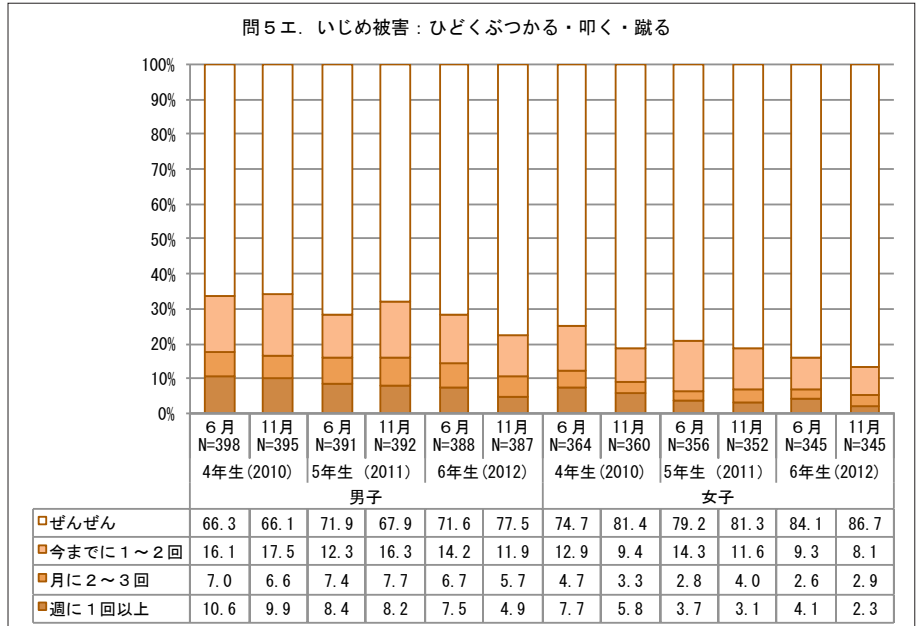


○「軽くぶつかる・叩く・蹴る」  
 日本の場合、3番目に被害経験率が高い行為ですが、ほかの国では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。  
 やや男子に多い傾向が窺えます。  
 男子は4年生から6年生で僅かに減る傾向が窺えますが、女子は5年生がピークになります。

○「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」

男子の被害経験率が高い傾向が  
うかがえます。

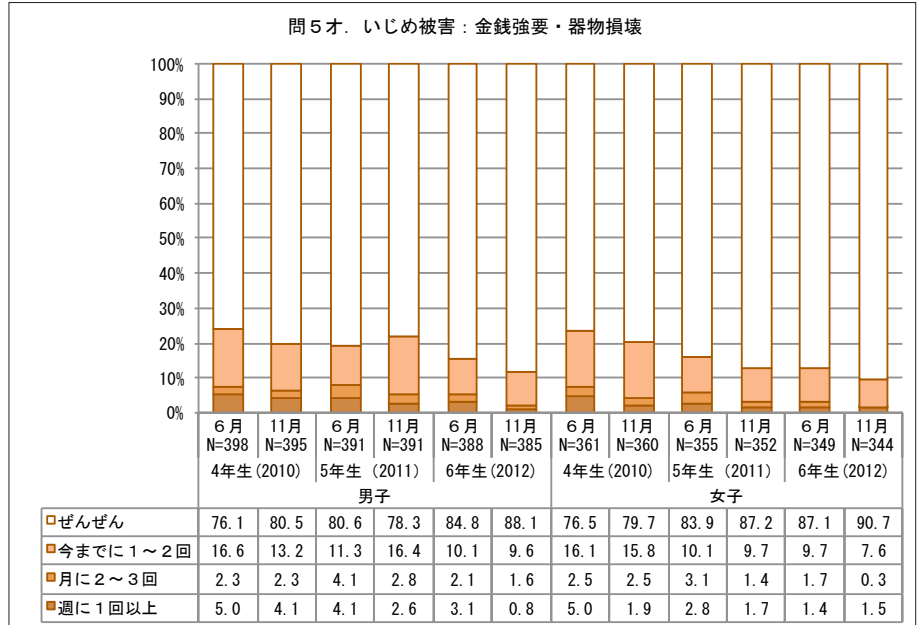
4年生から6年生にかけて、減  
少する傾向がうかがえます。



○「金銭強要・器物損壊」

男女ともに被害経験率は低いで  
すが、男子に多い傾向がうかがえます。

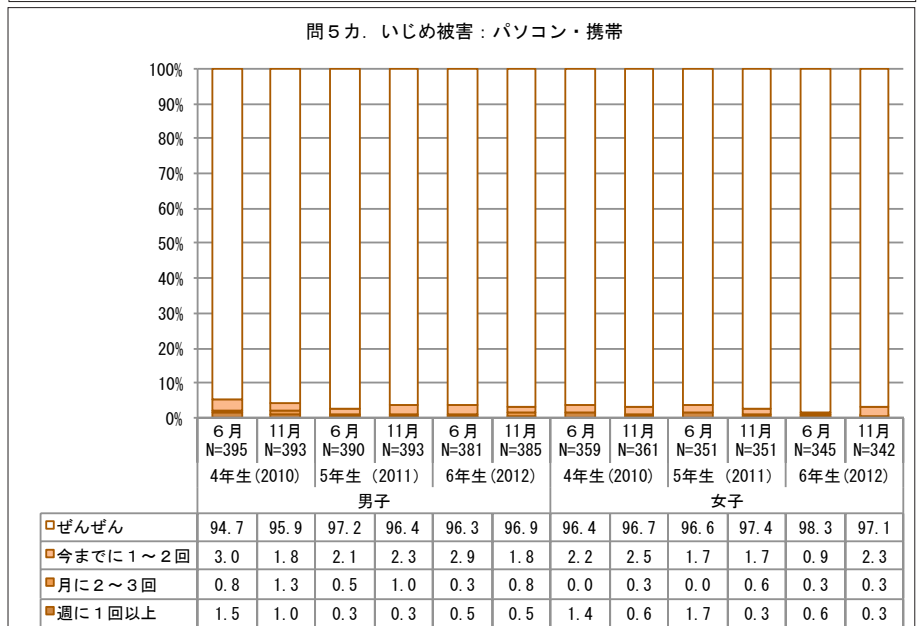
4年生から6年生にかけて、少  
しずつ減少する傾向がうかがえます。

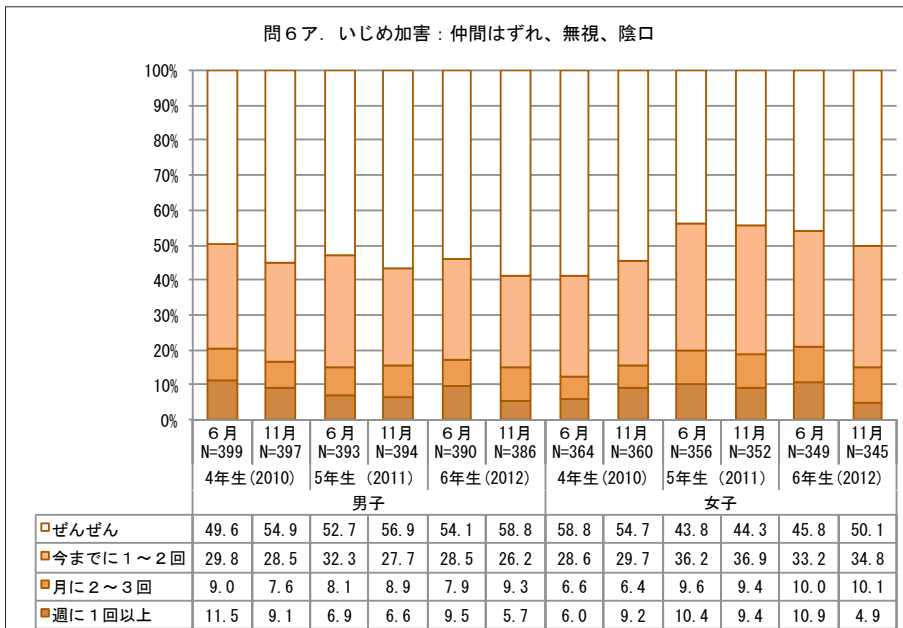


○「パソコン・携帯」

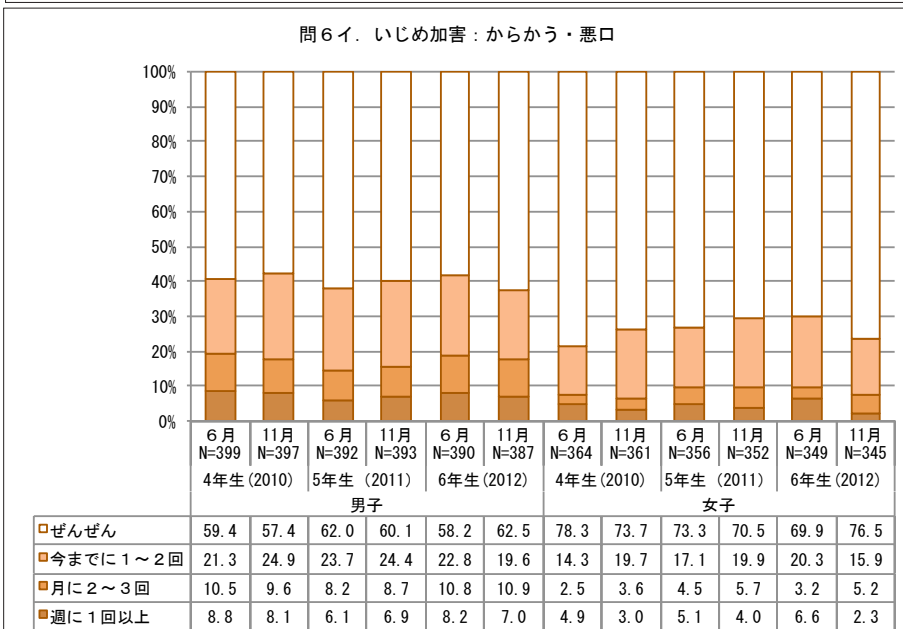
男女ともに、最も被害経験率が  
低い行為です。

学年進行に伴うはっきりした傾  
向はうかがえません。

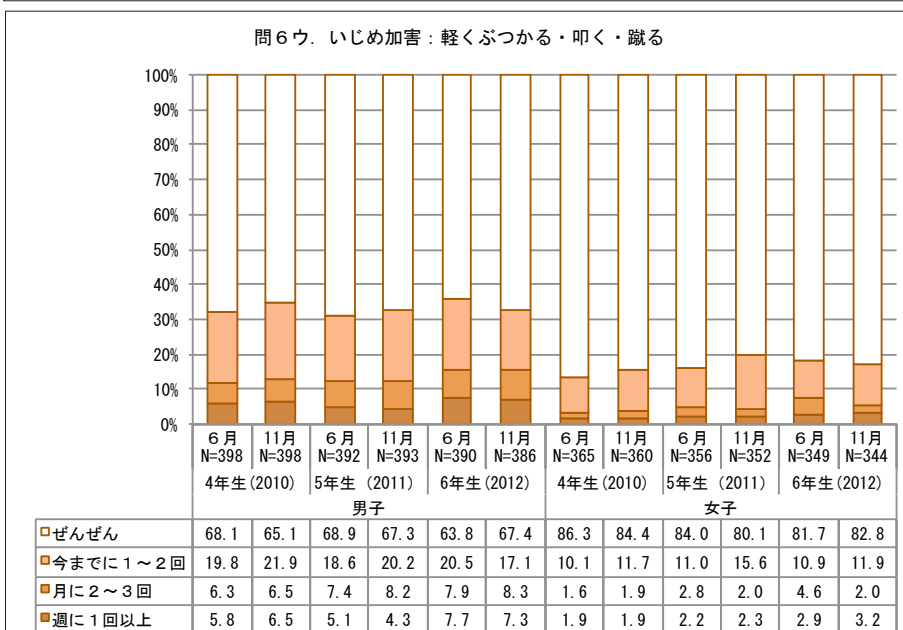




○「仲間はずれ・無視・陰口」  
男女ともに加害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。  
男子は4年生から6年生で僅かに減る傾向が窺えますが、女子は5年生がピークになります。



○「からかう・悪口」  
男女ともに加害経験率は高いですが、男子に多い傾向が窺えます。  
男子は4年生から6年生で僅かに減る傾向が窺えますが、女子は5年生がピークになります。

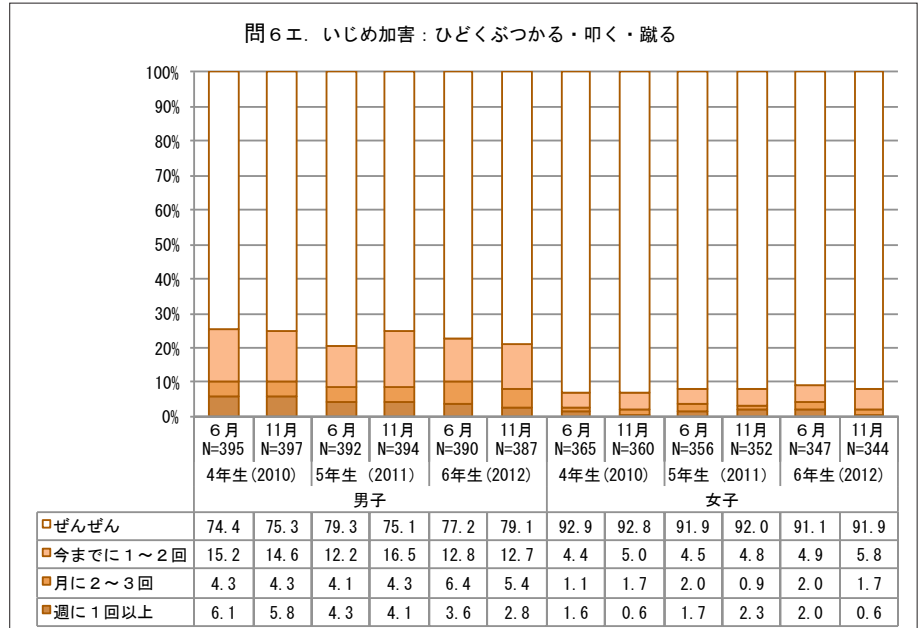


○「軽くぶつかる・叩く・蹴る」  
日本の場合、3番目に加害経験率が高い行為ですが、ほかの国では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。  
男子に多い傾向が窺えます。  
学年進行に伴う傾向は、頻度の高い加害は、5~6年生でやや高めの傾向が窺えます。

○「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」

男子の加害経験率が高い傾向が  
窺えます。

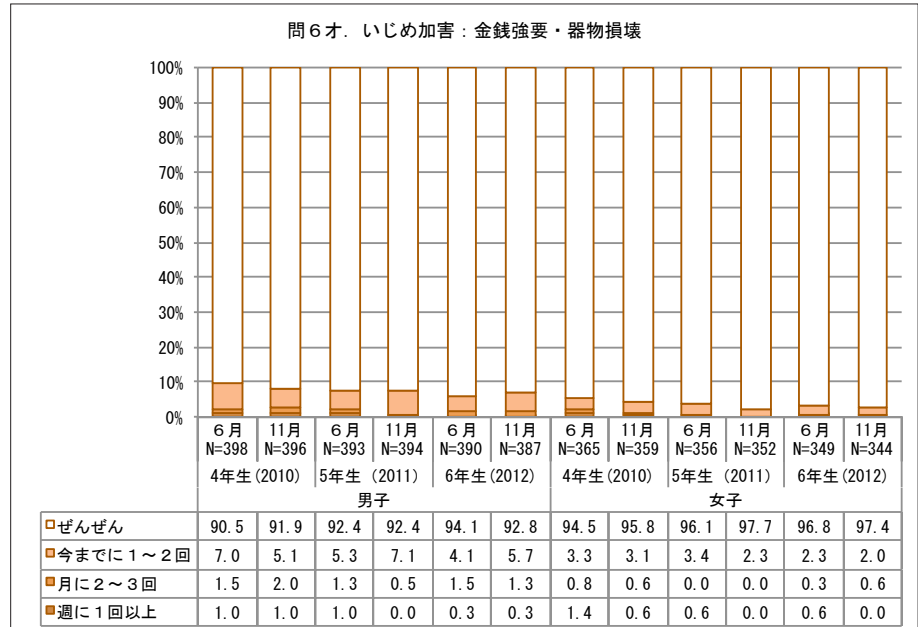
4年生から6年生にかけて、減  
少する傾向が窺えます。



○「金銭強要・器物損壊」

男女ともに加害経験率は低いで  
すが、やや男子に多い傾向が窺え  
ます。

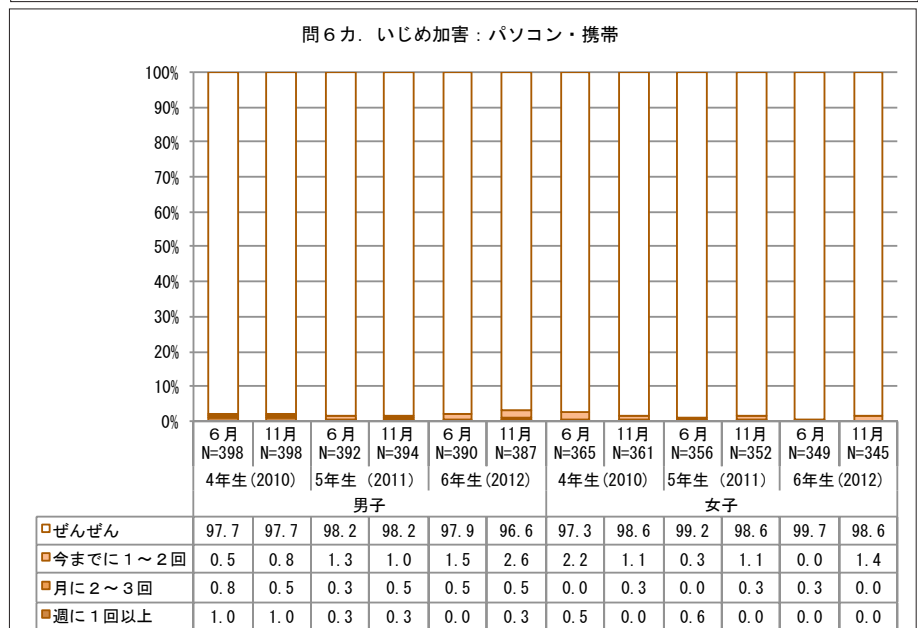
学年進行に伴うはっきりした傾  
向は窺えません。

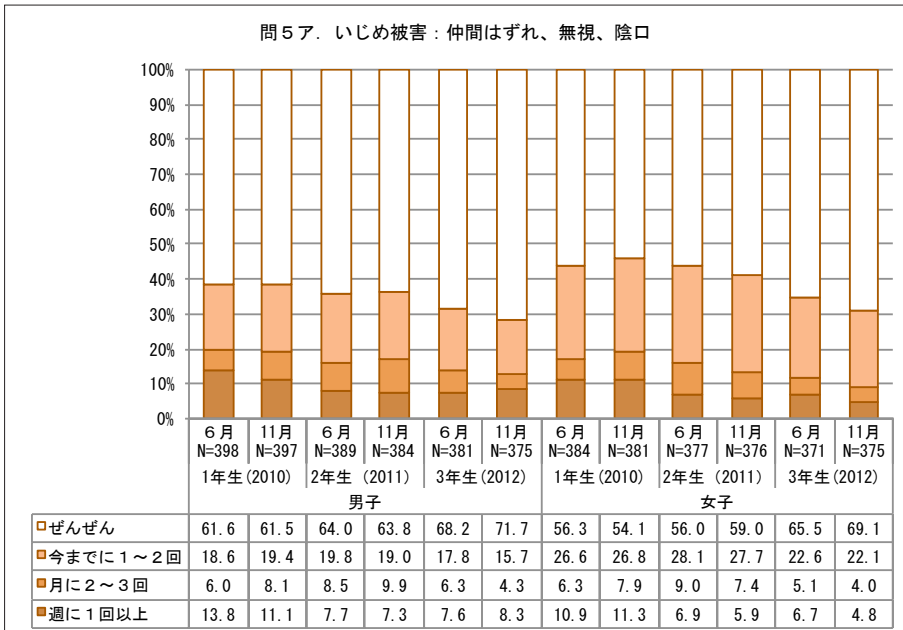


○「パソコン・携帯」

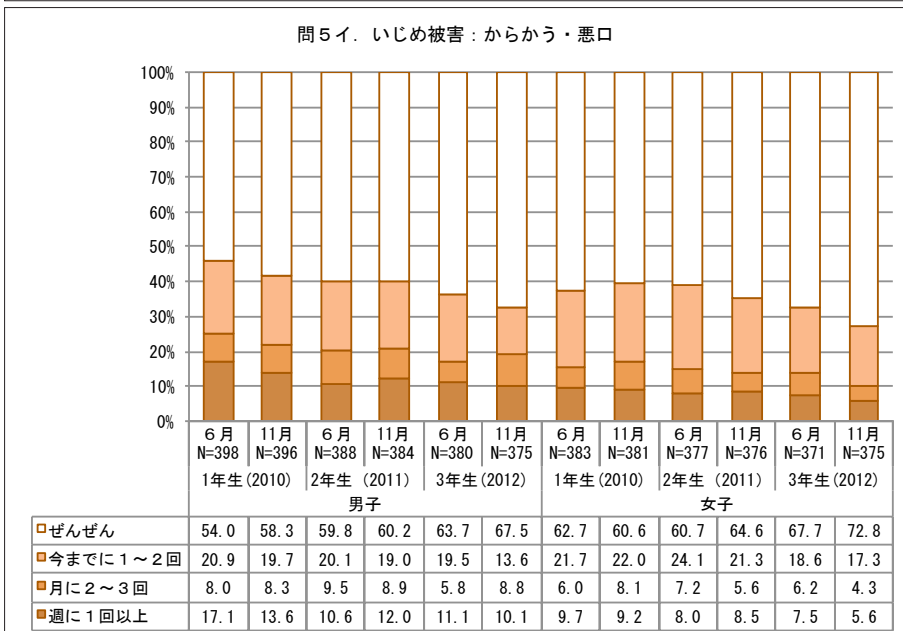
男女ともに、最も加害経験率が  
低い行為です。

学年進行に伴うはっきりした傾  
向は窺えません。

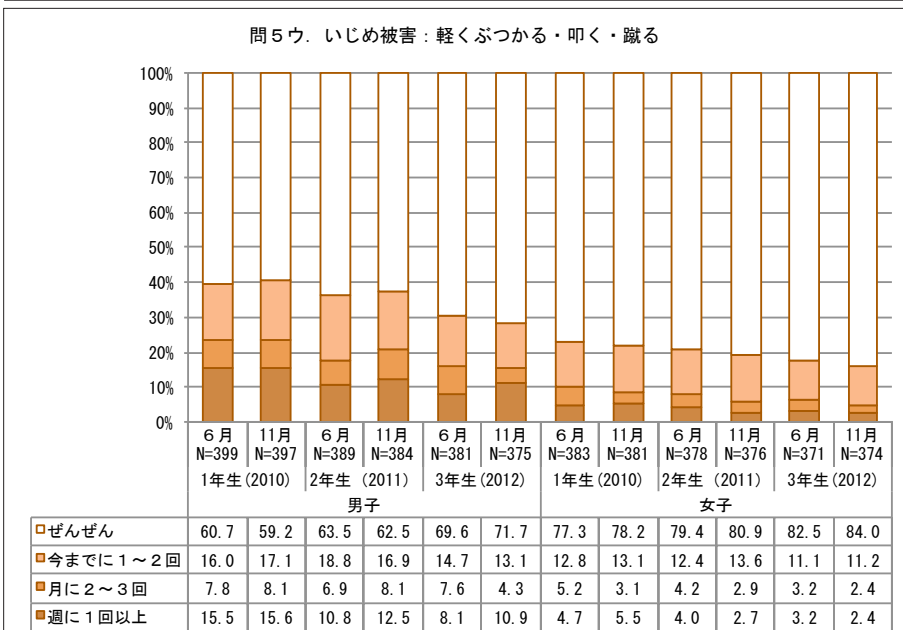




○「仲間はずれ・無視・陰口」  
男女ともに経験率は高いですが、女子に多い傾向が窺えます。  
1年生がピークで、少しずつ減少していく傾向が窺えます。



○「からかう・悪口」  
男女ともに経験率は高いです。  
1年生がピークで、少しずつ減少していく傾向が窺えます。

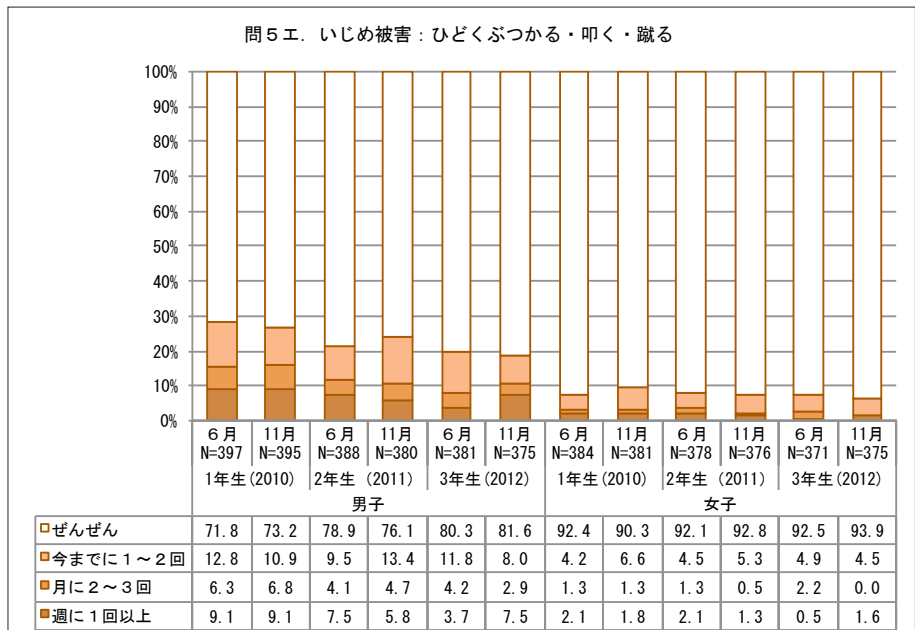


○「軽くぶつかる・叩く・蹴る」  
日本の場合、3番目に被害経験率が高い行為ですが、ほかの国では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。  
男子に多い傾向が窺えます。  
1年生がピークで、少しずつ減少していく傾向が窺えます。

○「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」

男子に多い傾向が窺えます。

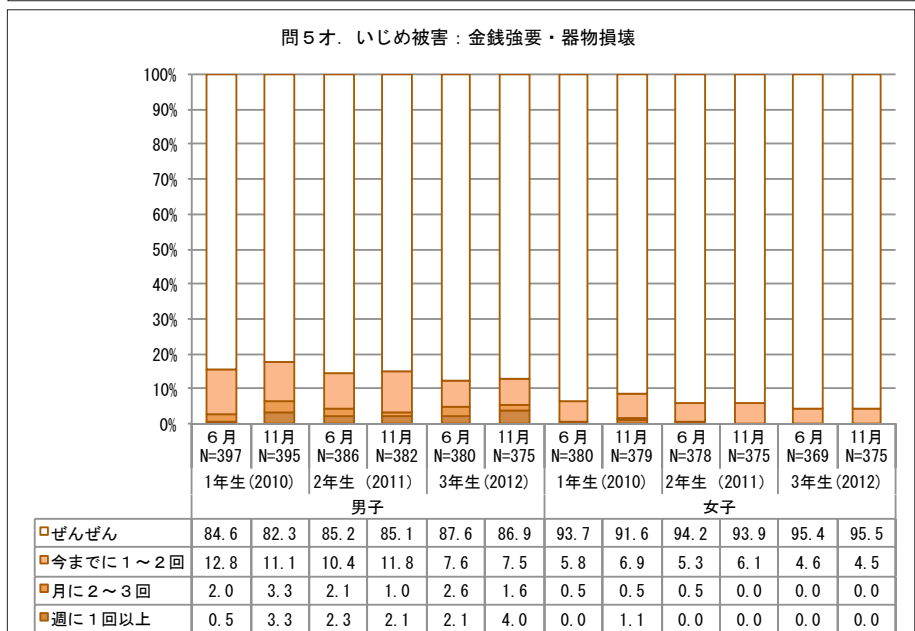
1年生がピークで、少しずつ減少していく傾向が窺えます。



○「金銭強要・器物損壊」

男女ともに経験率は低いですが、やや男子に多い傾向が窺えます。

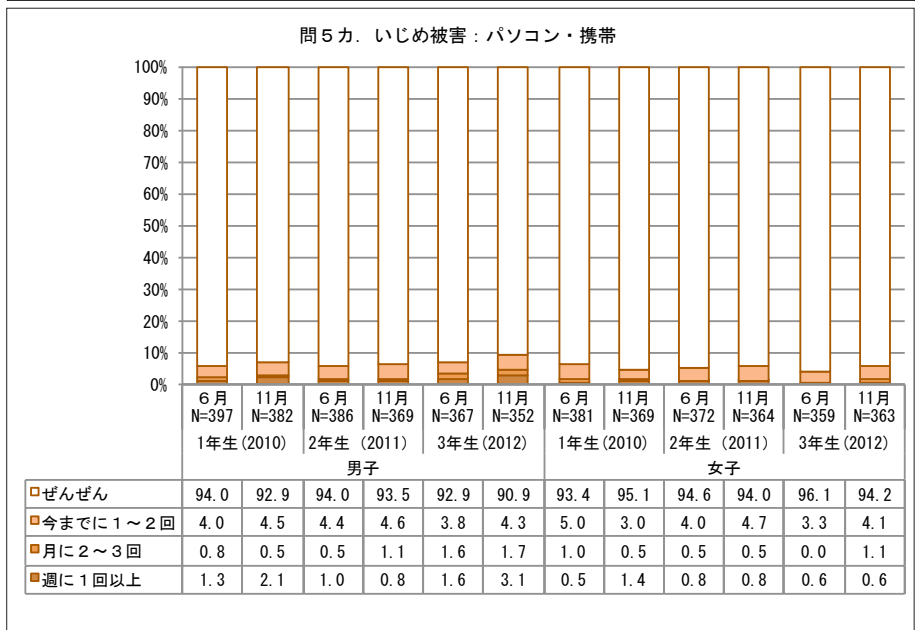
男子では、1年生から減少していく傾向が窺えます。

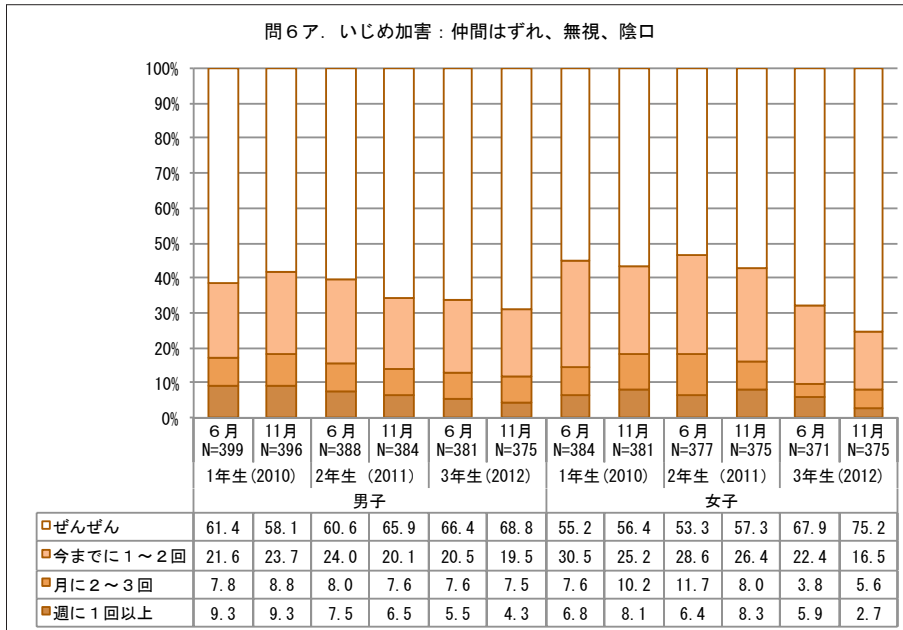


○「パソコン・携帯」

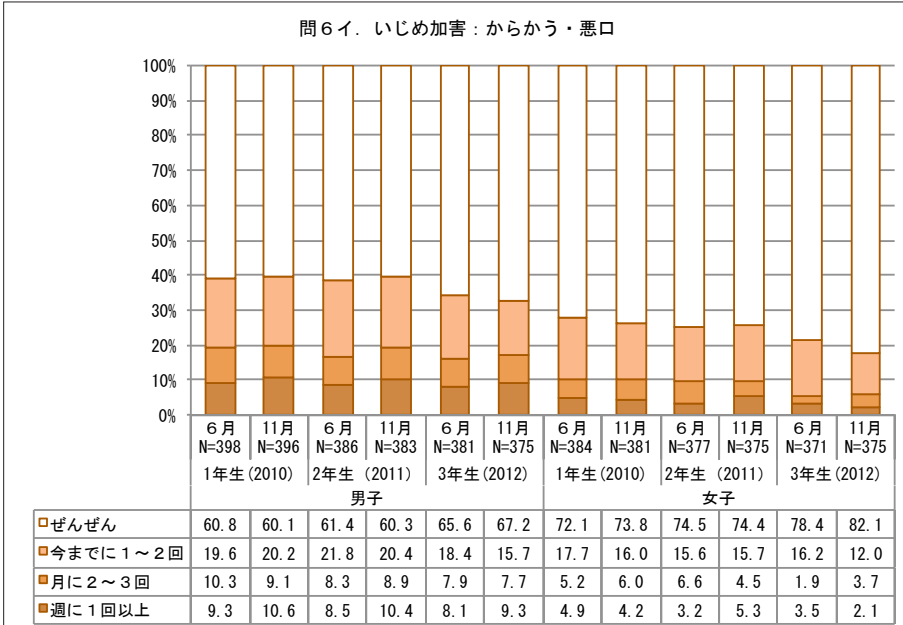
男女ともに、経験率は低い行為です。

学年進行に伴うはっきりした傾向は窺えません。

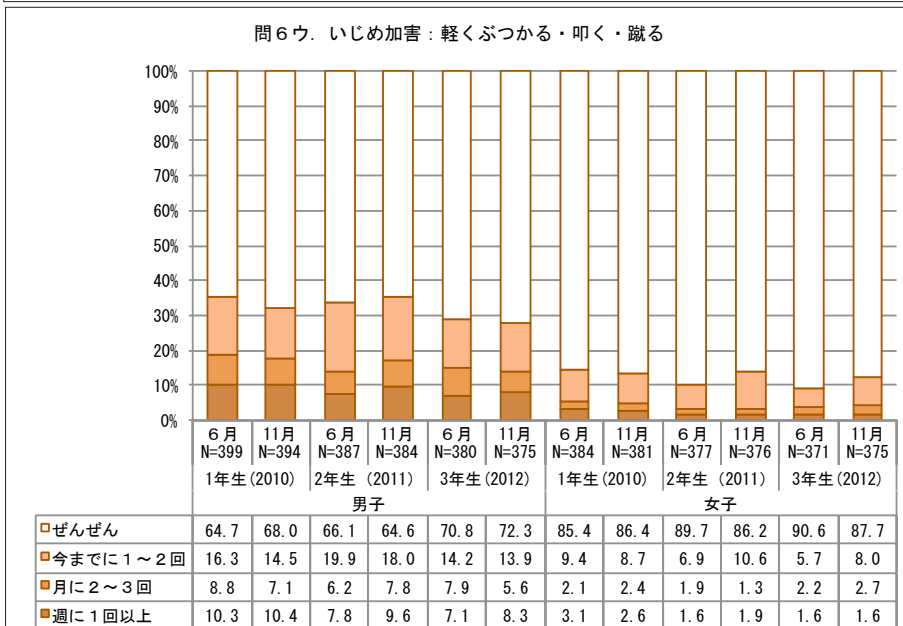




○「仲間はずれ・無視・陰口」  
男女ともに経験率は高いですが、女子に多い傾向が窺えます。  
男子は、1年生をピークに減少傾向が窺えます。女子は、2年生まで高い状況が続きます。

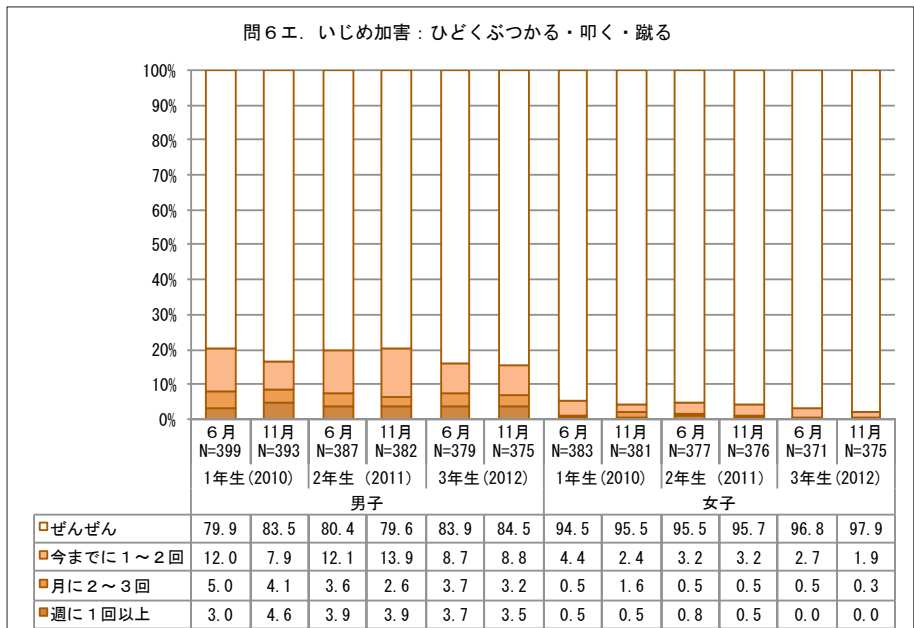


○「からかう・悪口」  
男女ともに経験率は高いですが、男子に多い傾向が窺えます。  
1年生をピークに減少傾向が窺えます。

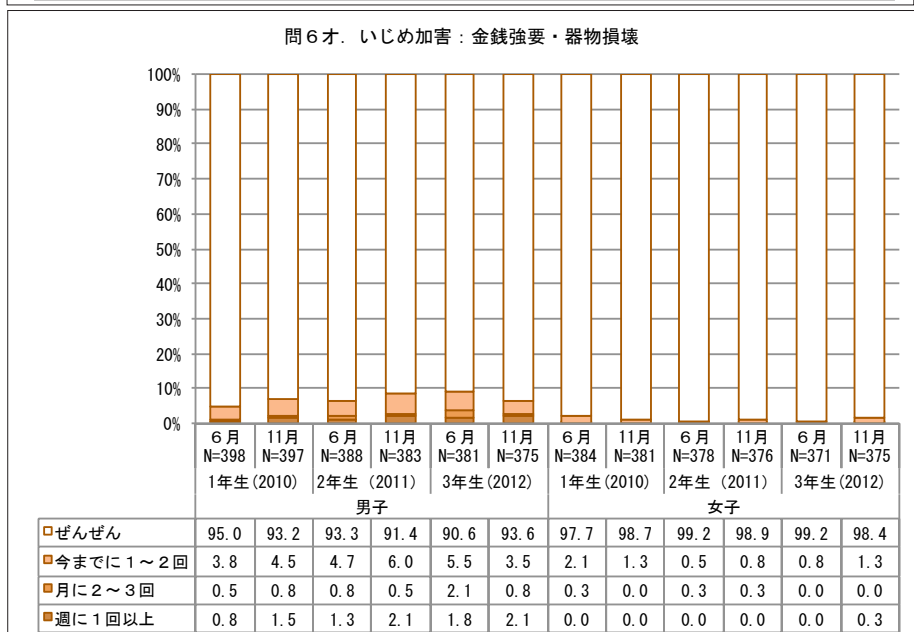


○「軽くぶつかる・叩く・蹴る」  
日本の場合、3番目に加害経験率が高い行為ですが、ほかの国では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。  
男子に多い傾向が窺えます。  
1年生をピークに減少傾向が窺えます。

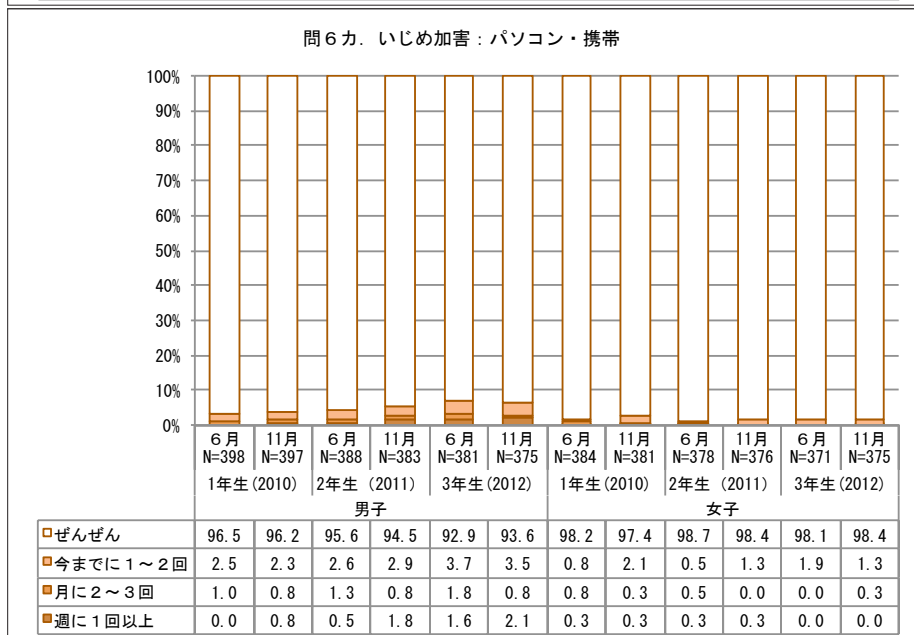
○「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」  
 男子に多い傾向が窺えます。  
 1年生にやや多い傾向があります。



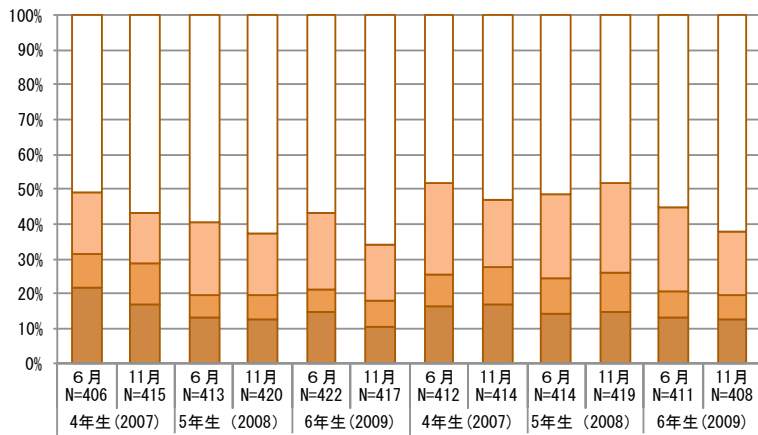
○「金銭強要・器物損壊」  
 男女ともに経験率は低いです  
 が、男子に多い傾向が窺えます。  
 学年進行に伴うはっきりした傾  
 向は窺えません。



○「パソコン・携帯」  
 男女ともに、経験率は低い行  
 為です。  
 学年進行に伴うはっきりした傾  
 向は窺えません。



問9ア. いじめ被害：仲間はずれ、無視、陰口



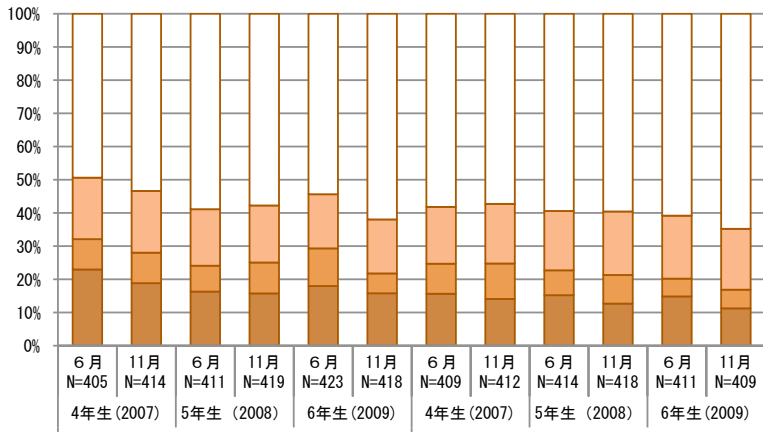
	男子						女子					
□ぜんぜん	50.7	56.9	59.3	62.6	56.6	65.9	48.3	52.9	51.2	48.4	55.5	62.3
■今までに1～2回	18.0	14.7	21.1	17.6	22.0	15.8	26.5	19.6	24.2	25.8	23.8	17.9
■月に2～3回	9.4	11.3	6.5	6.9	6.6	7.7	8.7	10.4	10.4	11.2	7.8	7.4
■週に1回以上	21.9	17.1	13.1	12.9	14.7	10.6	16.5	17.1	14.3	14.6	12.9	12.5

○「仲間はずれ・無視・陰口」

男女ともに被害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。

6年生の秋には、少し減少する傾向が窺えます。

問9イ. いじめ被害：からかう・悪口



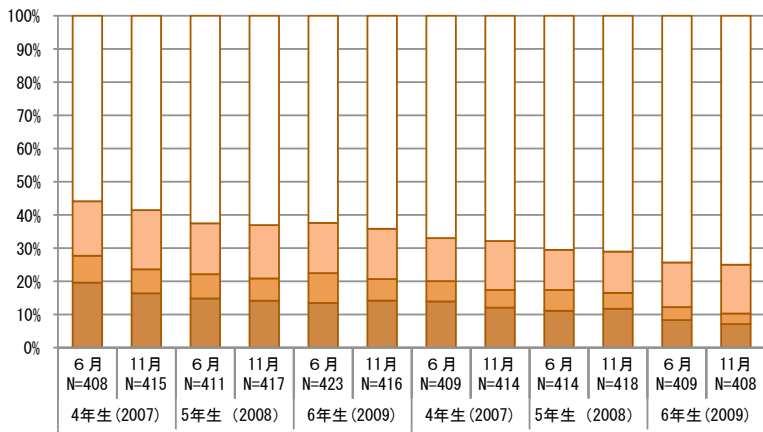
	男子						女子					
□ぜんぜん	49.4	53.4	58.9	57.8	54.4	62.0	58.2	57.3	59.4	59.6	60.8	64.8
■今までに1～2回	18.5	18.6	17.0	17.2	16.3	16.3	17.1	18.0	17.9	19.1	19.0	18.3
■月に2～3回	9.1	9.2	7.8	9.3	11.3	6.0	9.0	10.7	7.5	8.6	5.4	5.6
■週に1回以上	23.0	18.8	16.3	15.8	18.0	15.8	15.6	14.1	15.2	12.7	14.8	11.2

○「からかう・悪口」

男女ともに被害経験率は高いですが、やや男子に多い傾向が窺えます。

全体で見ると、5～6年生でやや減少する傾向が窺えます。

問9ウ. いじめ被害：軽くぶつかる・叩く・蹴る



	男子						女子					
□ぜんぜん	55.9	58.6	62.5	63.1	62.4	64.2	67.0	67.9	70.5	71.1	74.3	75.0
■今までに1～2回	16.4	17.8	15.3	16.1	15.1	15.1	13.0	14.7	12.1	12.4	13.4	14.7
■月に2～3回	8.1	7.2	7.3	6.7	9.0	6.5	6.1	5.3	6.3	4.8	3.9	3.2
■週に1回以上	19.6	16.4	14.8	14.1	13.5	14.2	13.9	12.1	11.1	11.7	8.3	7.1

○「軽くぶつかる・叩く・蹴る」

日本の場合、3番目に被害経験率が高い行為ですが、ほかの国では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。

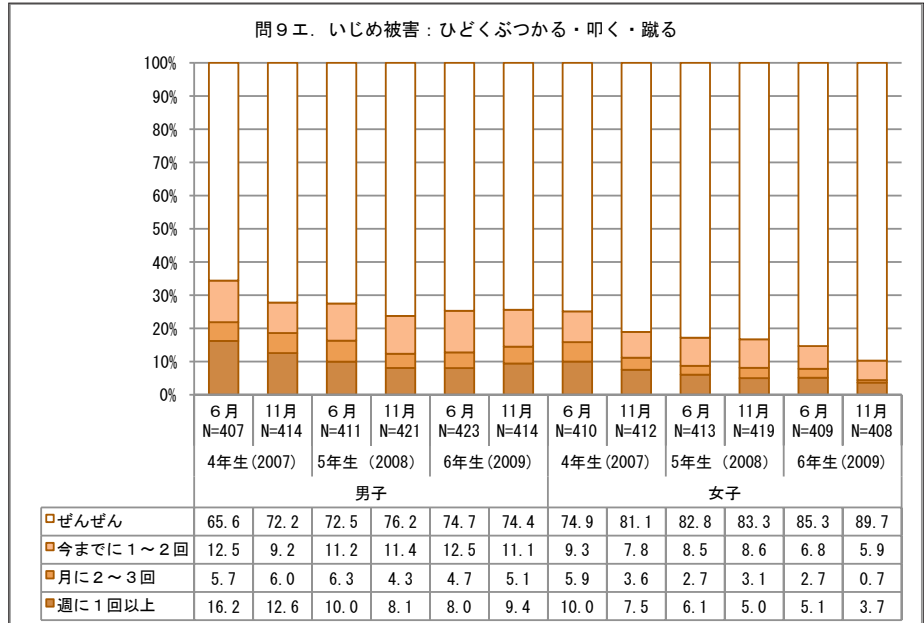
やや男子に多い傾向が窺えます。

4年生から6年生にかけて、少しずつ減少する傾向が窺えます。

○「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」

男子の被害経験率が高い傾向が  
うかがえます。

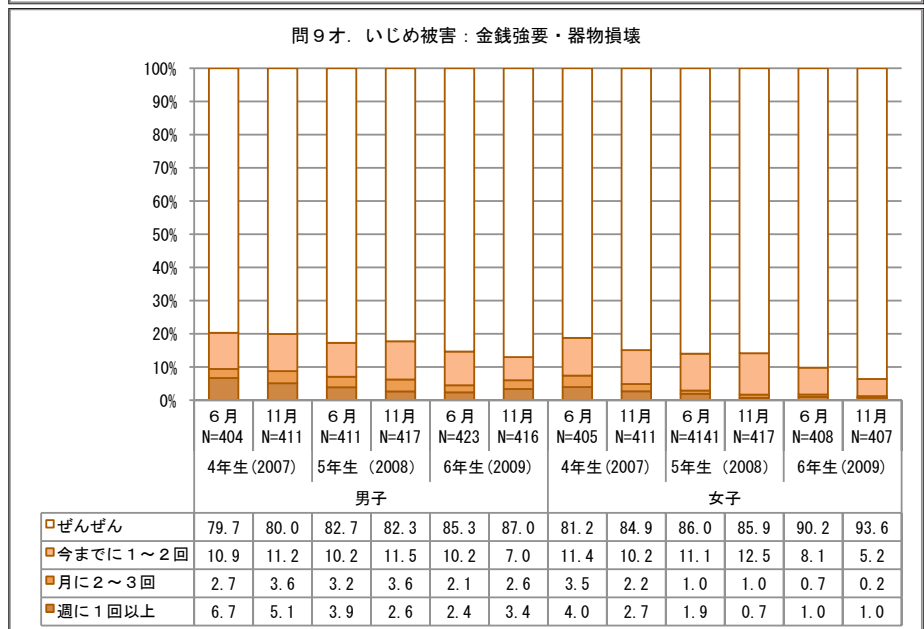
4年生から6年生にかけて、減  
少する傾向がうかがえます。



○「金銭強要・器物損壊」

男女ともに被害経験率は低いですが、男子に多い傾向がうかがえます。

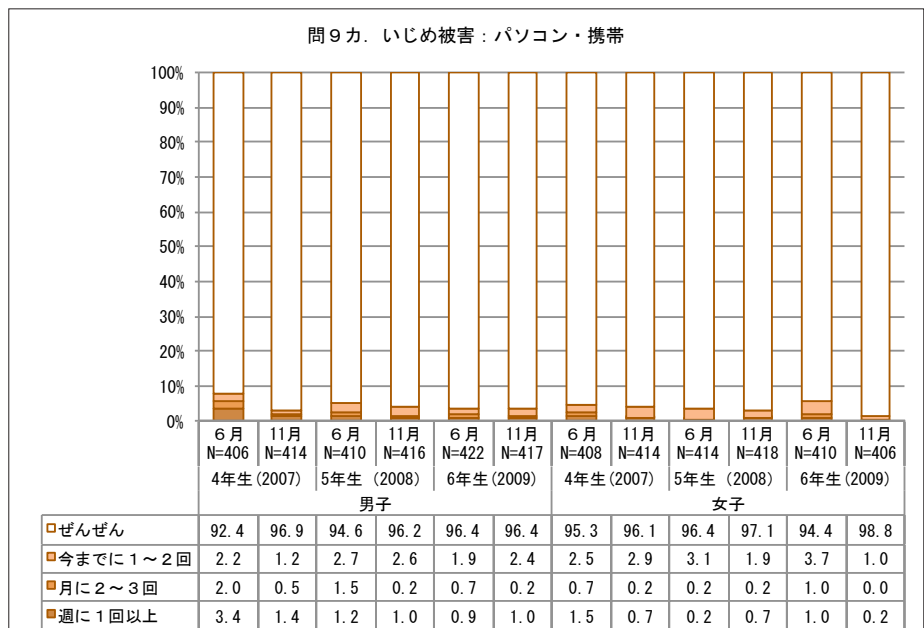
4年生から6年生にかけて、少  
しずつ減少する傾向がうかがえます。

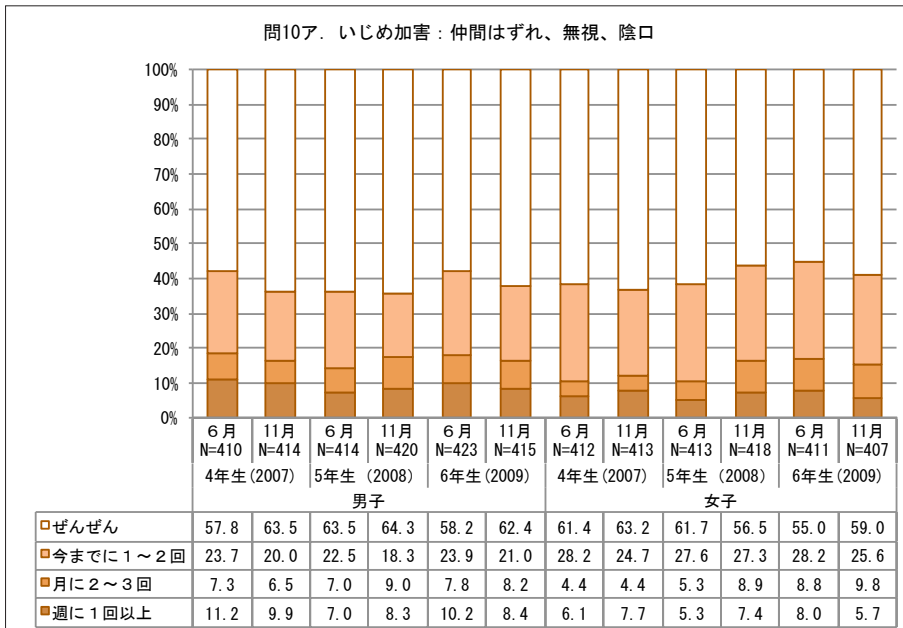


○「パソコン・携帯」

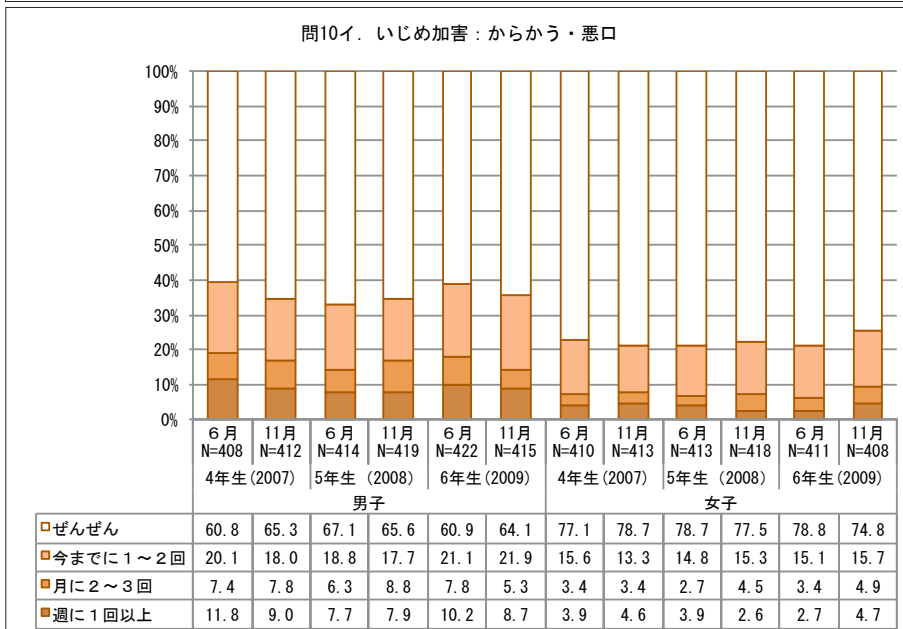
男女ともに、最も被害経験率が  
低い行為です。

学年進行に伴うはっきりした傾  
向はうかがえません。

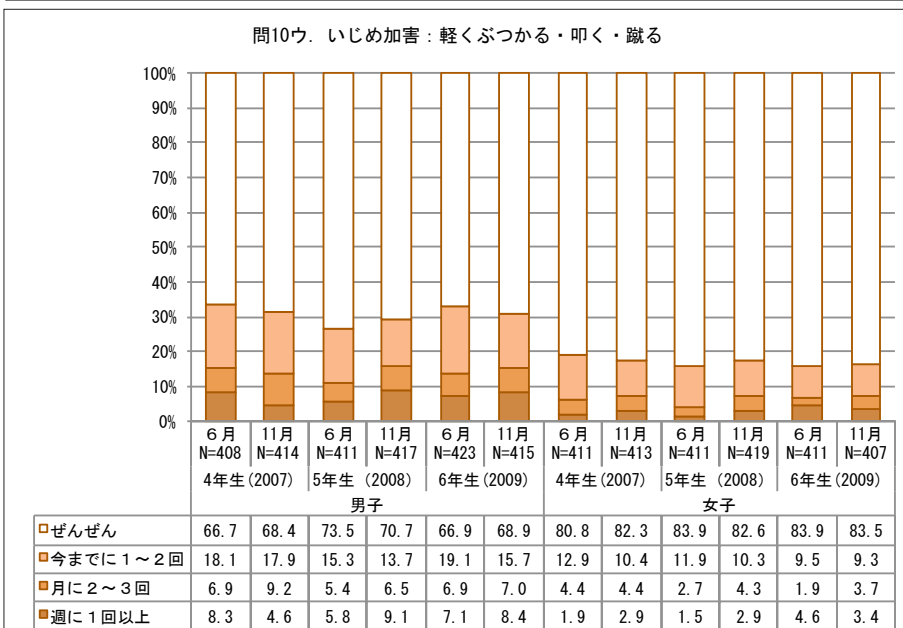




○「仲間はずれ・無視・陰口」  
男女ともに加害経験率は高いですが、やや女子に多い傾向が窺えます。  
4年生と6年生が高い傾向が窺えます。



○「からかう・悪口」  
男女ともに加害経験率は高いですが、男子に多い傾向が窺えます。  
4年生と6年生が高い傾向が窺えます。

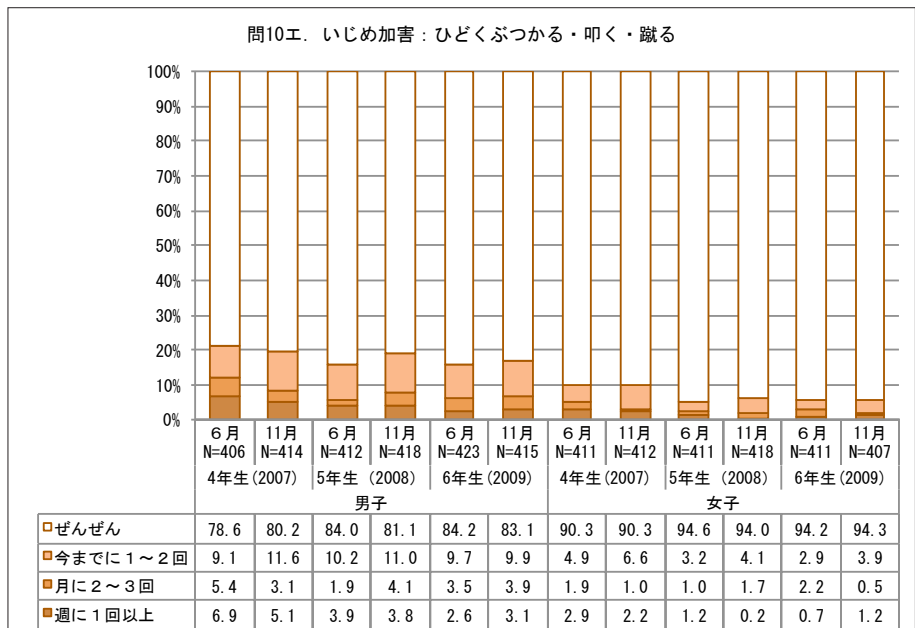


○「軽くぶつかる・叩く・蹴る」  
日本の場合、3番目に加害経験率が高い行為ですが、ほかの国では最も経験率が高いことの多い行為と言えます。  
男子に多い傾向が窺えます。  
学年進行に伴う傾向は、頻度の高い加害は、5~6年生でやや高めの傾向が窺えます。

○「ひどくぶつかる・叩く・蹴る」

男子の加害経験率が高い傾向が  
窺えます。

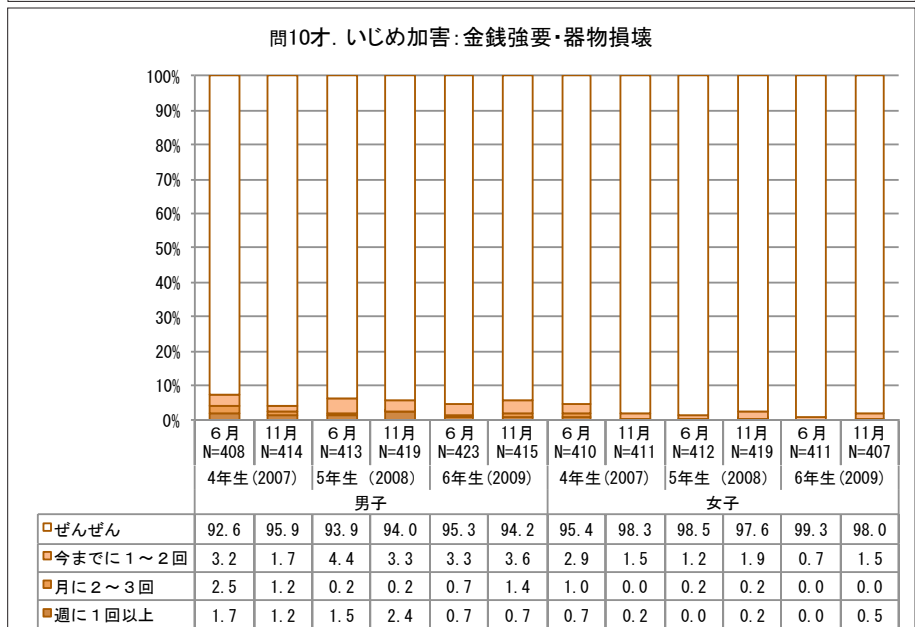
4年生から6年生にかけて、減  
少する傾向が窺えます。



○「金銭強要・器物損壊」

男女ともに加害経験率は低いで  
すが、やや男子に多い傾向が窺え  
ます。

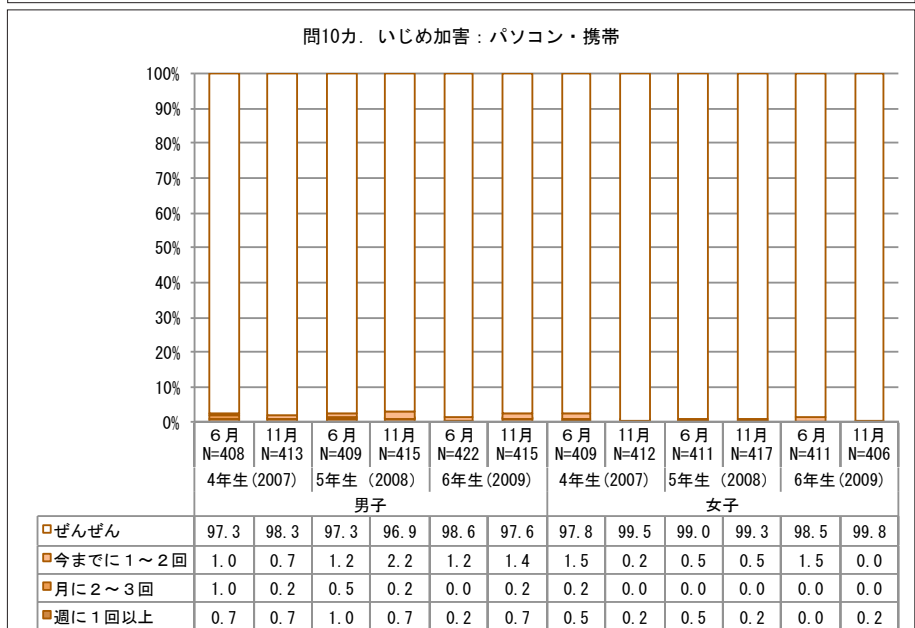
学年進行に伴うはっきりした傾  
向は窺えません。



○「パソコン・携帯」

男女ともに、最も加害経験率が  
低い行為です。

学年進行に伴うはっきりした傾  
向は窺えません。





文部科学省

国立教育政策研究所

National Institute for Educational Policy Research

編集 生徒指導・進路指導研究センター

T E L 03-6733-6880

F A X 03-6733-6967